山口県埋蔵文化財センター調査報告　第36集

中陵遺跡

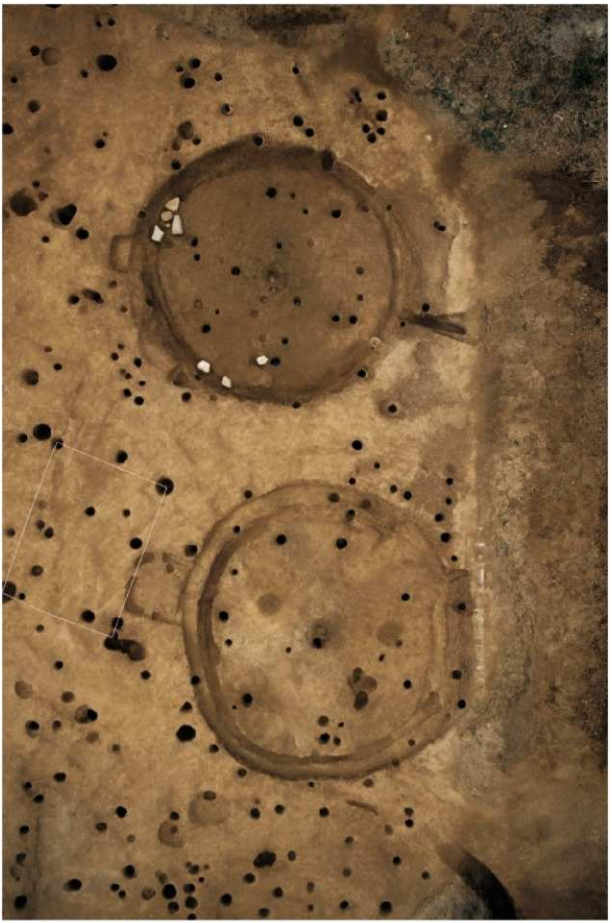
分銅形土製品（SB3より出土）

2003

財団法人　山口県教育財団
山口県埋蔵文化財センター

柳 井 市 教 育 委 員 会

題字　柳井市教育委員会生涯学習課　課長　牧野義寿



入口が確認された竪穴住居跡

序

本書は、柳井市の基盤整備促進事業に伴い財団法人山口県教育財団ならびに柳井市教育委員会が実施した中院遺跡の発掘調査報告書です。

中院遺跡の所在する柳井市には、市域南に突出する室津半島をはじめ市内各地に多くの遺跡が分布しています。このたびの発掘調査は、市内陸部では初めての本格的な発掘調査であり、郷土を築いた先人の足跡を今に伝える機会として注目されました。

調査の結果、弥生時代から中世にかけて営まれた集落跡が発見され、数多くの遺物が出土しました。なかでも入口を伴った竪穴住居跡の発見は、当時の人々の生活の様子を復元する上で新たな 1ページを書き加えるものです。

本書が、文化財保護への理解を深め、学術研究や郷土の歴史を学ぶ資料として、広く活用されることを願うものです。

終わりに、調査の実施ならびに報告書作成にあたり、ご指導・ご協力いただいた関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成 15年 3月

財団法人山口県教育財団
理事長　牛 見　正 彦

序

本書は、「基盤整備促進事業（担い手育成型）大里南地区」に伴い、財団法人山口県教育財団の支援を受けて、山口県埋蔵文化財センタ - と柳井市教育委員会が実施した中院遺跡発掘調査の記録であります。

現在の私たちにとって、先人が築き残した文化財は、ふるさとの歴史を解明する上でたいへん貴重な財産であります。この郷土の文化や伝統を継承しながら活用していくことは、活力と潤いに満ちた町づくりに欠くことのできないものであります。これらの文化財を損なうことなく未来へ伝えていくことは、2世紀に生きる私たちの使命であるといえます。

柳井市教育委員会は、埋蔵文化財の保護及び活用の立場から、原則として遺跡の現状保存の施策をとり、やむをえず遺跡が消失する場合に限って、発掘調査を実施し記録保存にすることとしております。このたびの基盤整備促進事業（担い手育成型）工事に先立って、関係諸機関と協議を重ねながら、現地踏査及び試掘調査等の予備調査を実施した結果、工事によって遺跡が消滅する範囲について、発掘調査を実施しました。

発掘調査の結果、弥生時代から中世にかけての遺構や遺物が確認されました。遺構としては、調査区の北西部で、残存状態の比較的よい弥生時代後期前半の竪穴住居跡２軒が検出されました。また、この竪穴住居跡の１軒から、分銅型土製品が発見されました。これらの遺構と遺物は、弥生時代の集落を考える上で、多くの示唆を与えてくれました。そして、数多くの弥生時代から古代・中世にかけての遺構と遺物は、ふるさとの歴史に新しい事実を加える貴重な資料となりました。

本書は、その成果をまとめたものであり、収録した資料とともに教育をはじめ学術・文化の振興のために、広く活用されますように願っております。

終わりに、調査の実施にあたって御指導御支援をいただきました山口県教育委員会、財団法人山口県教育財団山口県埋蔵文化財センタ - をはじめ、御協力をいただきました関係各位に対して、衷心より厚くお礼申しあげます。

平成 15年 3月

柳井市教育委員会
教育長　梅 本　節 治

例　言

1．本書は、山口県柳井市大字日積に所在する中院遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は、「基盤整備促進事業（担い手育成型）大里南地区」に伴い、柳井市の委託を受け、財団法人山口県教育財団並びに柳井市教育委員会が協同で実施したものである。また、調査の一部は、平成14年度国庫補助事業（大里遺跡）として行った調査である。

3．調査組織は次のとおりである。

調査主体　財団法人山口県教育財団　山口県埋蔵文化財センター
　　柳井市教育委員会

調査担当　指　導　主　事　西尾　健司（山口県埋蔵文化財センター）
　　指　導　主　事　椿　　英一（山口県埋蔵文化財センター）
　　調　　査　　員　有馬　啓介（山口県埋蔵文化財センター）
　　文化財保護指導員　松岡　睦彦（柳井市教育委員会）

4．調査にあたっては、山口県教育委員会、柳井市並びに地元関係各位から協力・援助を得た。

5．本書の第1図は、国土地理院発行の2万5千分の1地形図「由宇」「大畠」を複製使用したものである。第2図は、柳井市経済部経済建設課提供の地図を元に作成したものである。

6．本書に使用した方位は、個別遺構図は磁北、その他は国土座標（世界標準系）で示し、標高は海抜標高（m）である。

7．資料の鑑定、分析を下記の各氏に依頼した。記して謝意を表す。

竪穴住居跡	東北芸術工科大学芸術学科	教　授	宮本　長二郎
石製品の石材	山口大学理学部地球科学教室	教　授	今岡　照喜
	山口県立山口博物館	専門学芸員	亀谷　　敦

なお、石材鑑定は表面観察によるものである。

8．本書に使用した土色の色調の表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局（監修）『新版標準土色帖』Munsell方式による。

9．図版中の遺物番号は、実測図の遺物番号と対応する。

10. 土器実測図について、断面黒塗りは須恵器を示す。

11. 本書で使用した遺構略号は、次の通りである。

ＳＢ：住居跡・建物跡　ＳＫ：土坑　ＳＴ：埋葬跡　ＳＤ：溝
ＳＰ：柱穴　ＳＡ：柵　ＴＲ：トレンチ

12. 本書の作成・執筆は、西尾・椿・有馬・松岡が共同で行い、編集は西尾が行った。

本文目次

遺跡の位置と環境　1

調査の経緯と概要　3

調査の成果

1　遺構　15

2　遺物　37

まとめ　48

付編

1　中院遺跡の弥生時代建築遺構について　50

2　中院遺跡 4地区ＳＢ 3出土の分銅形土製品の検討　54

図 版 目 次

巻頭図版　入口が確認された竪穴住居跡

図版 1　1地区全景（東上空より）　7　図版 2　3地区全景（東上空より）　9

図版 3　3地区全景（南上空より）　11　図版 4　4地区全景（東上空より）　13

図版 5　東上空より遺跡を望む　遺跡全景（北より）

図版 6　1地区 ＳＢ 1（南より）　1地区 ＳＢ 1遺物出土状況（北より）・（西より）

図版 7　1地区 ＳＢ 4遺物出土状況（西より）　1地区 ＳＢ 4遺物出土状況（東より）

図版 8　4地区 ＳＢ 2（南より）　4地区 ＳＢ 2土器出土状況（東より）・（南より）

図版 9　4地区 ＳＢ 2（南より）　4地区 ＳＢ 2張り出し（南より）

図版 10　4地区 ＳＢ 3（南より）

図版 11　4地区 ＳＢ 3（西より）　4地区 ＳＢ 3土層（西より）　4地区 ＳＢ 3土器出土状況（北より）・（南より）

図版 12　3地区 ＳＢ 21（北より）　4地区 ＳＢ 6（南より）　3地区 ＳＢ 17（南より）　4地区 ＳＢ 7（南より）

図版 13　4地区 ＳＢ 5（南より）　4地区 ＳＢ 8（東より）　3地区 ＳＢ 39（南より）

図版 14　3地区 ＳＤ 1院掘（北より）　3地区 ＳＤ 1土層（北より）

図版 15　3地区 ＳＤ 1遺物出土状況　セクション 1（北より）・セクション 2（西より）・セクション 3（北より）

図版 16　3地区 ＳＤ 1遺物出土状況　セクション 4（北より）・（東より）

図版 17　3地区 ＳＤ 1遺物出土状況　セクション 5（北より）・（東より）　セクション 6（東より）

図版 18　3地区 ＳＤ 4院掘（南より）　3地区 ＳＤ 4土器出土状況（南より）　1地区ＳＫ 3土器 出土状況（北より）

1地区 ＳＫ 4土器出土状況（東より）　3地区 ＳＫ 13土器出土状況（北より）　1地区 ＳＫ 1院掘（南より）

3地区 ＳＫ 6院掘（南より）

図版 19　2地区 ＳＫ 22院掘（東より）　2地区 ＳＫ 7院掘（南より）　2地区 ＳＫ 9院掘（西より）

1地区 ＳＫ 23土器出土状況（東より）　3地区 ＳＴ 1遺物出土状況（東より）

2地区 ＳＴ 1除塗木製品出土状況（南より）

図版 20　4地区 ＳＰ 108土器出土状況（西より）　4地区 ＳＰ 140土器出土状況（東より）

4地区 ＳＰ 102土器出土状況（北より）　4地区 ＳＰ 14土器出土状況（西より）

4地区 ＳＰ 139土器出土状況（南より）　4地区 ＳＰ 152土器出土状況（南より）

3地区 ＳＰ 153土器出土状況（南より）　3地区 ＳＰ 20土器出土状況（東より）

図版 21　3地区 ＳＰ 52土器出土状況（東より）　3地区 ＳＰ 154土器出土状況（南より）

3地区ＳＰ 24土器出土状況（東より）　3地区 ＳＰ 2石塔出土状況（東より）

1地区 ＳＰ 12土器出土状況（南より）　1地区 ＳＰ 12土器出土状況（西より）
1地区 ＳＰ 16土器出土状況（西より）　1地区 ＳＰ 16土器出土状況（西より）
図版 22　1地区 ＳＢ２ 3出土土器・土製品
図版 23　1地区 ＳＢ 1出土土器
図版 24　1地区 ＳＢ 4出土土器　2地区 ＳＤ 1出土土器
図版 25　2地区 ＳＤ 1出土土器
図版 26　2地区 ＳＤ 1出土土器
図版 27　2地区 ＳＤ 1出土土器
図版 28　2地区 ＳＤ 1出土土器
図版 29　2地区 ＳＤ 1出土土器
図版 30　2地区 ＳＤ 1出土土器・土製品
図版 31　ＳＫ・ＳＴ出土土器
図版 32　ＳＫ・ＳＰ出土土器・土製品
図版 33　ＳＰ出土土器　遺物包含層出土土器　出土石製品
図版 34　出土石製品　出土鉄製品

挿図目次

第 1図　遺跡の位置と周辺の主な遺跡　2
第 2図　周辺の地形と調査区設定図　6
第 3図　1地区遺構配置全体図　8
第 4図　2地区遺構配置全体図　10
第 5図　3地区遺構配置全体図　12
第 6図　4地区遺構配置全体図　14
第 7図　ＳＢ２ 実測図　16
第 8図　ＳＢ３ 実測図　17
第 9図　ＳＢ１ 実測図　18
第 10図　ＳＢ４ 実測図　19
第 11図　ＳＢ 17・19 20・21・22 25 実測図　20
第 12図　ＳＢ５ 6・7・8 10 11 実測図　21
第 13図　ＳＢ 29 30 39・ＳＡ１ 実測図　22
第 14図　柱穴遺物出土状況実測図　24
第 15図　柱穴遺物出土状況実測図　25
第 16図　柱穴遺物出土状況実測図　26
第 17図　ＳＤ１ 遺物出土状況概略図　27
第 18図　ＳＤ１ セクション１・２ 3 遺物出土状況実測図　28
第 19図　ＳＤ１ セクション４ 遺物出土状況実測図　29
第 20図　ＳＤ１ セクション５ 遺物出土状況実測図　30
第 21図　ＳＤ１ セクション６ 遺物出土状況実測図　31
第 22図　ＳＤ２～５ 実測図　32
第 23図　ＳＫ 実測図　33
第 24図　ＳＫ 実測図　34
第 25図　ＳＫ 実測図　35
第 26図　ＳＴ１ 実測図　36
第 27図　ＳＢ１・２ 3 出土土器実測図　38
第 28図　ＳＢ４ 出土土器実測図　39
第 29図　ＳＤ１ 出土土器実測図　40
第 30図　ＳＤ１ 出土土器実測図　41
第 31図　ＳＤ１ 出土土器実測図　42
第 32図　ＳＤ１ 出土土器実測図　43
第 33図　ＳＤ１ 出土土製品実測図　43
第 34図　ＳＫ・ＳＴ出土土器実測図　44
第 35図　ＳＫ・ＳＰ出土土器・土製品実測図　45
第 36図　遺物包含層出土土器実測図　46
第 37図　石製品 実測図　46
第 38図　鉄製品 実測図　47
第 39図　黒谷川郡師遺跡 （ SB601）　49

表目次

第 1表　土坑一覧表　36

遺跡の位置と環境

中院遺跡は、行政的には山口県東南部に位置する柳井市大字日積字智雲院（中院自治会）に所在する。柳井市は、昭和29年の町村合併により、近隣の柳井町、日積村、伊陸村、新庄村、余田村の5町村と合併して誕生した市であり、その直後に、瀬戸内海に浮かぶ南の島、平郡村が編入合併された。昭和31年には、柳井市南部の阿月村、伊保庄村が合併して現在の柳井市に至っている。したがって、現在の日積地区は、柳井市の北東部にあたる山間農業地域であり、ほとんどが兼業農家となっている。

日積地区の地形は、四方を低い丘陵に囲まれた狭い盆地状をなしている。すなわち、東に銭壺山（標高540.1m）、南に琴石山（標高545.5m）・三ケ岳（標高487.0m）、西から北にかけては、標高300m前後の山地が囲んでいる。地区のほぼ中央部を南東から北西へ伸びる城山（標高353.6m）・高鉢山（標高251.0m）の低い山塊によって二分されており、北側を大里地区、南側を日積地区とよんでいる。また、山塊によって二分された両地区には、大里川と日積川がそれぞれ南東から北西へ向かって流れ、北西方の小国で合流した後、流れを北東方向にかえながら由宇川となって、由宇町の北東部海岸から瀬戸内海へ注ぎ込んでいる。

中院遺跡は、大里川中流域の左岸にあたる洪積層の河岸段丘上に立地している。したがって、この遺跡では、各時代のほとんどの遺構は、赤みを帯びた褐色粘質土に掘り込まれているが、遺跡の東部と西部の小範囲の遺構は、円礫混じりの土層に掘り込まれている。大里川の氾濫原と遺跡が立地する河岸段丘上との比高差は、15m前後であり、段丘上面は、南東から北西方向に緩やかに傾斜して段丘崖に至り、崖下には県道伊陸・大畠港線が、大里川左岸を東西方向に走っている。

日積地区では、今年度発掘調査がなされた遺跡は、今回の中院遺跡と、日積川左岸の台地上に立地する中世の杉氏館跡を除いてはない。縄文時代の遺跡は、大原遺跡が由宇川左岸の低位河岸段丘上にあり、縄文後期の土器をはじめ土師器・須恵器・古代の土師器等が耕作中に出土する遺物分布地である。弥生持代の遺跡には、今回発掘調査した中院遺跡の対岸で、約1500m東方の高位段丘上に位置する尾崎原遺跡があり、今後の基盤整備事業予定地であるが、大里川水系にかかわる集落の盛衰を示唆している。

古墳時代には、琴石山の南山麓に立地する国指定の茶臼山古墳があり、古墳公園として保存整備されており、教育・学術・文化振興等に広く活用されている。日積地区には、同名の茶臼山古墳や清常古墳があるが、発掘調査はされていない。

なお、柳井市北部の山間地域は、大規模な開発行為がなかったが、近年になって道路拡幅工事やほ場基盤整備事業等が始まってから、事前の現地踏査や試掘調査等により、新たな遺跡が発見され、開発に伴う埋蔵文化財の発掘調査が実施されるようになった。したがって、今後、この地域の原始からの歴史が解明されることになるだろう。（松岡）

第１図　遺跡の位置と周辺の主な遺跡

調査の経緯と概要

1．調査に至る経緯

平成 12年 5月、「基盤整備促進事業（担い手育成型）大里南地区」の主体者である柳井市長（事業担当課：柳井市経済建設課）から大里南地区（大里一中院）における埋蔵文化財の有無について、柳井市教育委員会教育長あてに、文書により依頼があった。これを受けて柳井市教育委員会（生涯学習課文化財室）は現地で工事予定区内の地表踏査を行い、工事に先立つ埋蔵文化財試掘調査が必要な地区について、 10月下旬に試掘を実施する旨を柳井市に回答した。

柳井市教育委員会は同年 10月 26、 27日に試掘調査を実施した。 25か所のトレンチ調査の結果、 17か所で柱穴、礎石等の遺構及び多数の土器片を検出した（埋蔵文化財分布面積： 12 000 ）。柳井市教育委員会は柳井市に、事前に埋蔵文化財発掘調査の必要箇所、面積等について文書で回答するとともに、山口県教育委員会文化財保護課に試掘調査の結果について報告した。

平成 13年 5月、柳井市は山口県との協議により、平成 14年度に大里南地区の基盤整備促進事業の工事着工と同時に、中院遺跡の発掘調査を実施することとなった。そのことを受けて、柳井市教育委員会は、山口県教育委員会文化財保護課と協議、指導を受けて、発掘調査費を予算化した。

調査は財団法人山口県教育財団が柳井市の委託を受け、平成 14年 7 月より行うこととなった。なお、工事工法等により、発掘調査面積は 3 200 となる。

2．調査の概要

平成 14年 6月下旬より発掘調査の事前準備を開始した。 6月 2日、現地にて柳井市教育委員会との打ち合わせを行い、 6月 30日には作業員説明会を開催した。 7 月 10日から重機を入れての表土除去を開始し、 7 月 19日に調査区内の耕土剥ぎが終了した。

7 月 16日、発掘器材を搬入したのち、作業員を入れての本格的な作業が開始した。 7月 18日と 22日

重機による表土除去

発掘体験学習

には遺構面確認のためのトレンチ調査を行った。耕土、盤土の下に 10～80 程度の埋土を確認した。その後、再び重機を用いて遺構面まで掘り下げた。すでにこの時点で、多数の柱穴や土坑とともに 1 地区・4地区では竪穴住居跡、2地区では南西から北東方向に延びる大きな溝状遺構が検出された。7 月 29日からは遺構検出を開始した。その結果、1 地区内には 2箇所で広範囲の遺物包含層が確認された。そのため遺物包含層にグリッドやトレンチを設定し、徐々に掘り込んでいった。8月 6日には 4地区までの遺構検出がほぼ終了した。

8月 8日から 1 地区より遺構の掘り込み作業を開始した。1 地区からは弥生土器、土師器が多く出土した。最も暑さの厳しい時期の作業のため、作業員の健康状態には十分配慮して調査を行った。8月 20日から 2地区の遺構掘り込み作業に入った。まず、表土除去の時点ですでに確認されていた大きな溝（ＳＤ 1）の掘り込みから開始した。土層確認のため 3箇所ほど壁を残して掘り下げていった。溝からは多数の完形に近い弥生土器とともに、山口県では周防部に分布の偏る分銅形土製品が出土した。9月 2日から 2地区の掘り込み作業と平行して、4地区にある 2軒の竪穴住居跡（ SB2 SB3）の掘り込みを開始した。9月 4日には、ＳＢ 3の中層から明地遺跡出土のものと類似した分銅形土製品の破片が発見された。9月 5日には 2地区の遺構掘り込み作業が終了し、3地区の遺構掘り込みに取り掛かった。また、9月 6日からは一時遺物包含層ではないかと考えていた 1地区の竪穴住居跡（ SB1 ）の本格的な掘り込みも始めた。SB1 からは祭祀に使用されたと考えられる小型の手捏ね土器や鉄釘、3本の主柱穴を検出した。また、床面には火災に伴うものと思われる焼土や炭化物も確認された。

9月 15日の大雨により遺構のほとんどが水没してしまい、復旧作業に 1週間以上の時間を費やした。しかし、地面が水分を含み柔らかくなったことで、日照り続きで検出しづらかった遺構検出で新たな遺構を多数確認できた。9月 24日には、ＳＢ 2から住居に伴う入口張り出し部が確認された。国内でも類例のない残存度の高い張り出し部で、新聞紙面でも注目を集めた。9月 28には、現地説明会を行った。研究者の他に近郊を中心に約 200名近くの参加者があり、発掘調査に対する地元の関心の高さを実感した。特に 2地区の大きな溝（ SD 1）や 4地区の入口張り出し部が確認された竪穴住居跡（ SB2

遺構検出

遺構掘り込み

SB3) の周りには大きな人だかりができるほど盛況だった。

10月からは、大型遺構の掘り込みや新たに確認された柱穴の掘り込みを中心に作業は進められた。また、1地区の北西部に広がっていた遺物包含層の掘削を行い、その下に古墳時代のものと考えられる方形の竪穴住居跡（SB4）を確認した。10月7日には東北芸術工科大学の宮本長二郎教授が来訪し、入口張り出し部が確認された竪穴住居跡に関して指導を受けた。10月9日からは2地区SD1内の弥生土器の取り上げを開始し、さらに掘り込みを進めた。

11月からは、遺構に溜った水の排水や調査区内外の清掃作業を中心に行った。11月7日に無事空中写真撮影を行った。12月2日、調査区すべての実測を終え、12月5日に柳井市教育委員会と柳井市経済建設課の関係者立ち会いのもと引き渡しを行い、現地での調査のすべてを終了した。

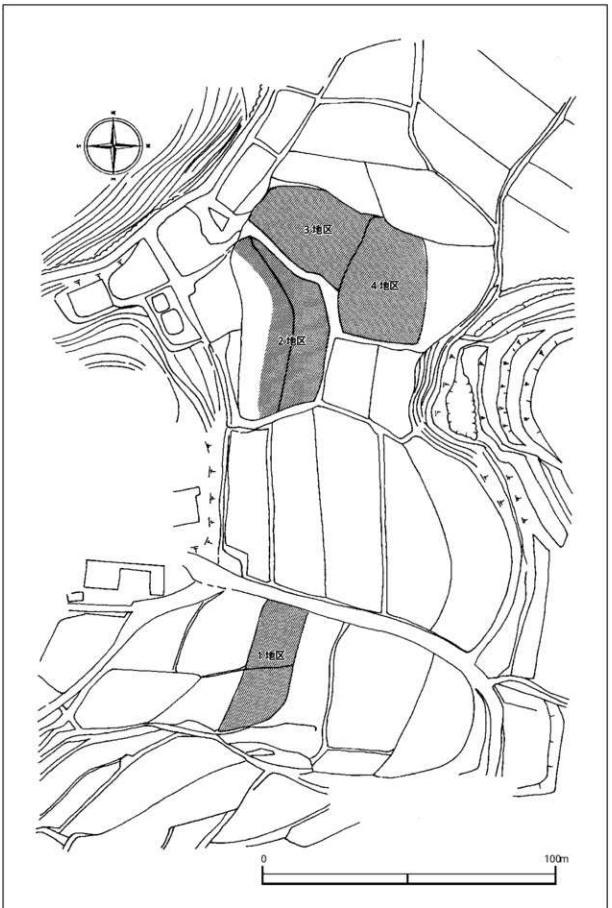
7月から12月上旬のまでの発掘調査が行われた約5ヶ月間、この期間中には新聞社やテレビ局等の報道機関を含め多数の見学者、来訪者があった。また、8月には大和中学校、9月には日積小学校と日積中学校、10月には大里小学校が発掘体験学習に訪れた。どの子も夢中に真剣な表情で発掘を行っていた。遠い歴史が身近に感じられた1日になったのではないだろうか。

5ヶ月間に及ぶ調査の結果、事前の予想を上回る貴重な資料が多数出土した。張り出し部を伴った住居跡が検出されて以降、保存か破壊かという議論が地域で沸き上がっていた。本遺跡の発掘調査が、豊かさを追い求める時代の影で一方的に破壊されていく埋蔵文化財について考える機会を提供してくれたといえる。

猛暑、短い秋、そして記録的に早い冬の訪れと季節はあっという間に流れたが、事故やけがもなく無事に調査を終えることができた。これも、関係者、作業員並びに地元の方々のご理解、ご協力によるものと心から感謝するとともに厚くお礼を申し上げる。

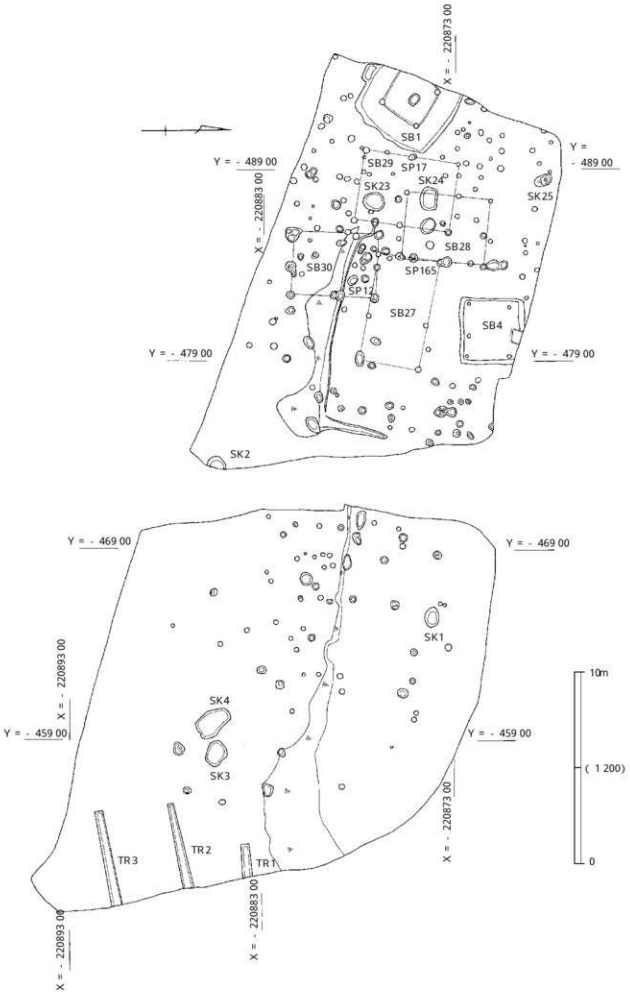
発掘体験学習

現地説明会

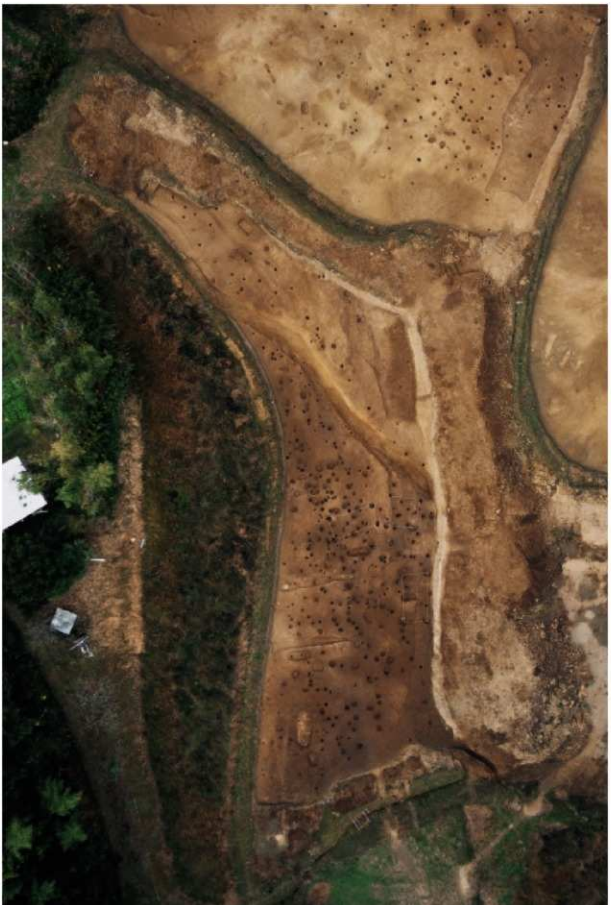


第２図　周辺の地形と調査区設定図

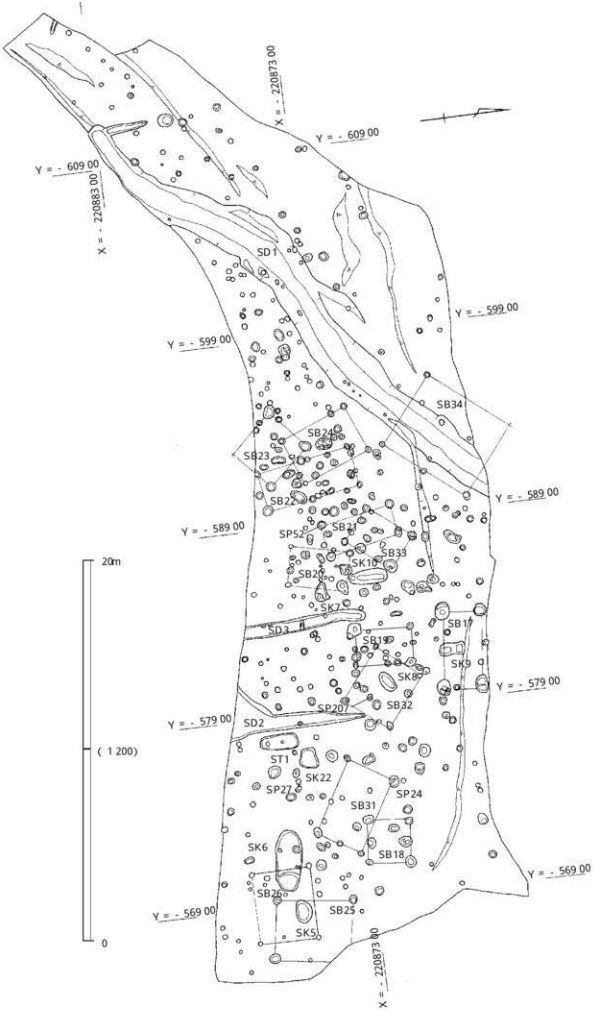
図版１　１地区全景（東上空より）



第３図　１地区遺構配置全体図

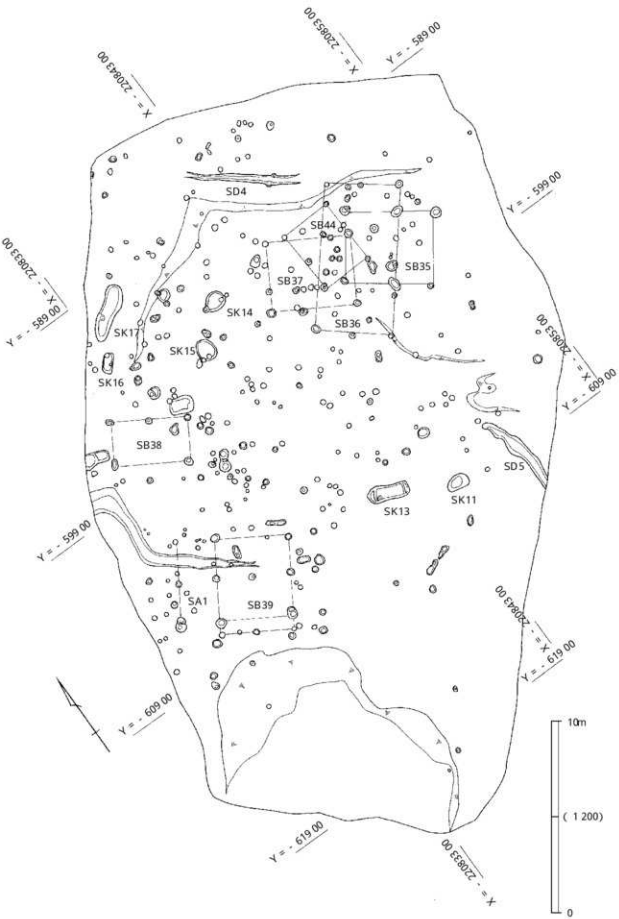


図版２　２地区全景（東上空より）



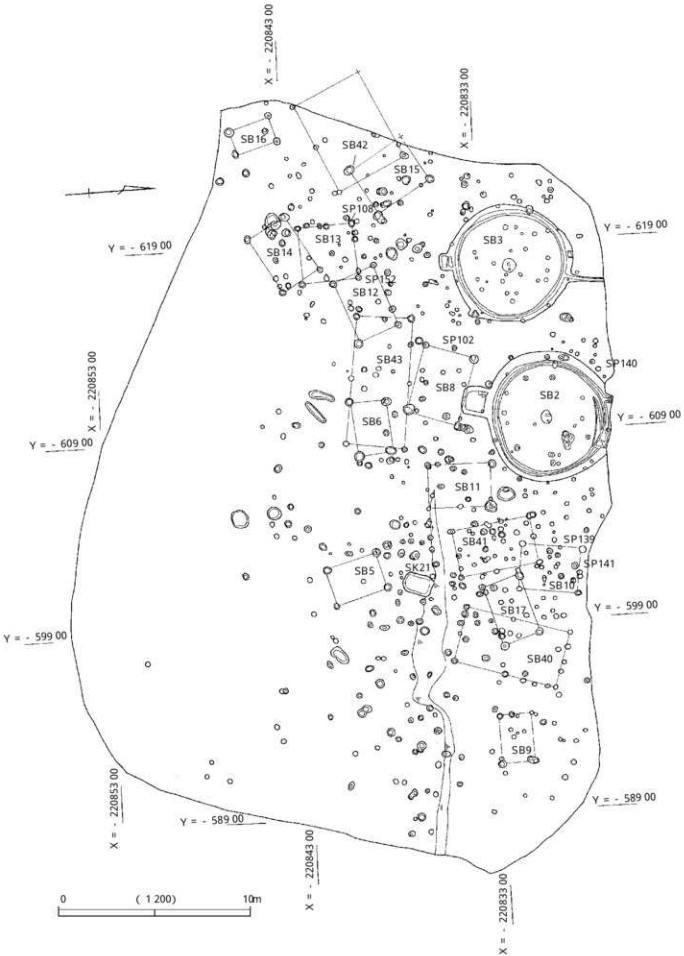
第４図　２地区遺構配置全体図

図版３　３地区全景（南上空より）



第５図　３地区遺構配置全体図

図版４　４地区全景（東上空より）



第６図　４地区遺構配置全体図

調査の成果

1　遺　構

今回の調査で検出された遺構は、竪穴住居跡4軒、掘立柱建物跡40棟、溝状遺構5条、土坑22基、埋葬遺構1基、柱穴とみられる小ピットが約1500(うち遺物が出土した柱穴は250)である。これらの遺構は、出土遺物から弥生時代と中世のものが多いと考えられる。遺構面は、後世の水田開発などにより一部削平を受けており、トレ4地区の南側、3地区の東側で遺構密度が薄いが、その他の地域ではほぼ全面から検出されている。

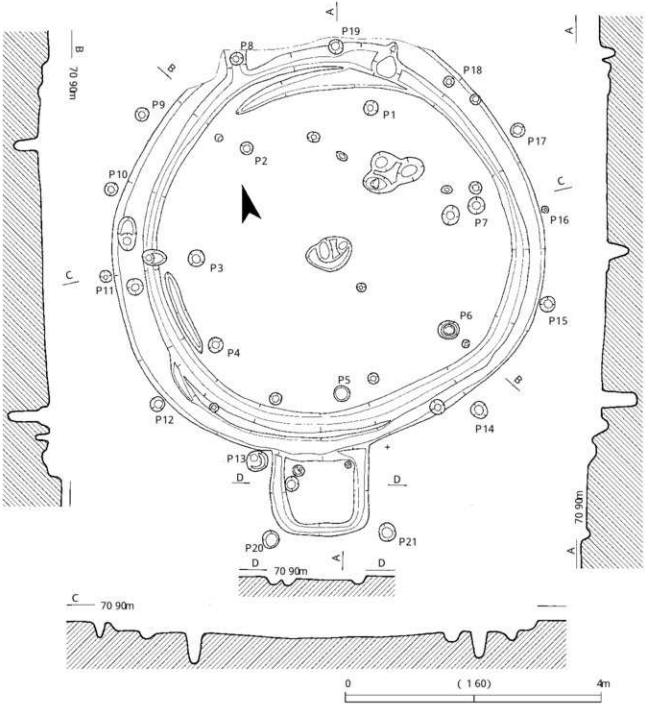
(1)竪穴住居跡(第7図～10図)

住居跡4軒のうち、ＳＢ2・3は4地区北西端に位置し平面形は円形、ＳＢトレ4は1地区西側に位置し平面形は方形である。4軒すべてに周溝を有し、ＳＢトレ2・3には南側に張り出し部を有する。

ＳＢ2(第7図　図版8・9)　4地区北西側で検出した南側に張り出し部を有する壁立式円形竪穴住居である。規模は東西6.9m、南北7.8m(張り出し部を含む最大値)を測る。床面に達するまで2段掘されており、検出面からの深度約15cm、幅20cm～40cmのテラス状の床が廻る。側壁用の段落ちまたは建替・拡張の可能性も考えられる。検出面から床面までの深度は25cm～55cm、埋土は黒褐色粘質土である。周溝は幅20cm～40cm、深さ約5cmを測り、北側への排水路も検出する。主柱穴は7本(P1～P7)で床面からの深度は45cm～60cm。中央ピットを有するが用途は不明である。側壁支柱12本(P8～P19、P13・14の間1本欠失)を検出する。南側に付随する張り出しは玄関部と考えられ、幅155cm、奥行120cmを測り、幅25～35cm、深さ5～12cmの溝が廻る。張り出し部から住居部に流れ込む水は、高さ約7cm程度の土壁を蔦って緩やかに周溝に流れ落ちるよう施されている。また、庇用の柱穴2本(P20・21)を検出する。床面から小型の壺、ピットから壺の底部、埋土から石鏃4点ならびに多量の土器片が出土している。弥生時代後期前半に位置づけられる。

ＳＢ3(第8図　図版10・11)　ＳＢ2の西側に隣接して検出された壁立式円形竪穴住居である。ＳＢ2同様に南側に張り出し部を有する。規模は東西6.3m、南北7.0m(張り出し部を含む)を測る。検出面から床面までの深度は15cm～35cm、埋土は黒褐色粘質土である。周溝は壁下を廻り、幅15cm～30cm、深さ約12cmを測り、北側への排水路も検出する。主柱穴は6本(Q1～Q6)で床面からの深度は42cm～65cm。直径約70cmの中央ピットを有するが用途は不明である。側壁支柱1本(Q7～Q17、Q13・14の間1本欠失)を検出する。南側に付随する張り出しは玄関部と考えられ、幅72cm、縦60cmを測り、2段のステップを有する。2段目のステップの縦の長さや段差が小さいことから、ここに板等を置き出入りしていた可能性がある。庇用の柱穴4本(Q12・Q13・Q18・Q19)を検出する。床面から鉄鑿と思われる鉄製品、周溝から鉢、埋土から分銅形土製品をはじめ多量の土器片が出土している。弥生時代後期前半に位置づけられる。ＳＢ2との先後関係は不明であるが、2軒の距離はわずか1.8mしかなく、同時期に並存していた可能性は低いと考えられる。

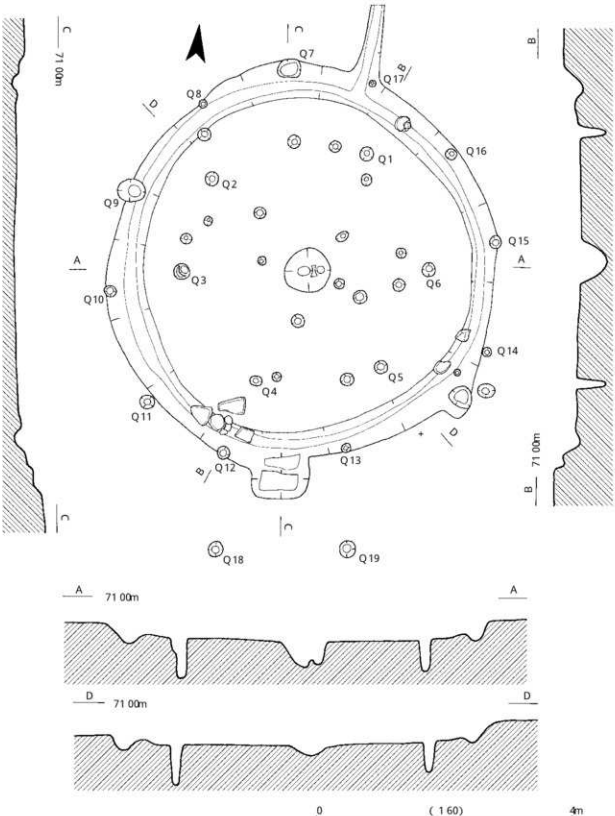
ＳＢ1(第9図　図版6)　1地区西端で検出された竪穴住居である。ＳＢトレ2同様に南側に張り出し部を有する。全体の3/4程度の検出であるが、平面形態、規模を推定復元すると、一辺4.4m前後を測る隅丸正方形プランを呈する。周溝は壁下を廻り、幅約20cm、深さ約10cmを測る。検出面から床面までの深度は約50cm前後で、床面に方形の中央ピットを含むピット4基を検出する。主柱穴はRトレ2



第7図　SB2　実測図

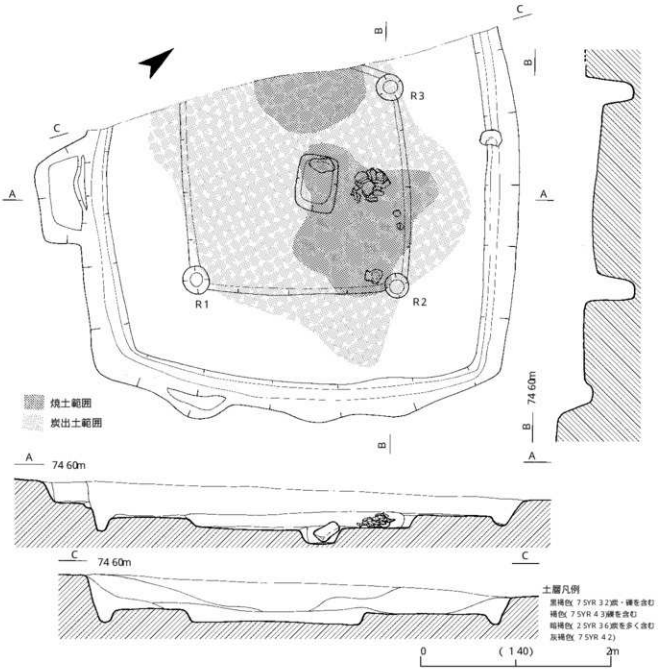
を含む4本柱穴に復元でき、床面からの深度は34cm～44cmである。床面は主柱穴で囲まれる範囲の外側がベット状になっており、10cm前後の比高差がある。南側に付随する張り出しは玄関部と考えられ、幅約1m、縦約50cmを測り、2段のステップを有する。2段目のステップの縦の長さや段差が小さいことからここに板等を置き出入りしていた可能性がある。埋土は下層に多量の炭化物を含み、焼土も確認された。焼失家屋の可能性が高い。中央ピットから砥石、埋土から鉢や礫、手捏ね土器などが出土している。弥生時代終末期に位置づけられる。

ＳＢ４(第10図　図版7)　地区北西側で検出された方形竪穴住居である。辺が東西3.4m、南北3.3mを測る。周溝は壁下を廻り、幅約14cm、深さ約8cmを測る。主柱穴はS1・2・3・4の4本柱穴に復元



第8図　SB3　実測図

でき、床面からの深度は約20cmである。北壁中央付近に1辺約60cm、比高差約8cmのベット状遺構を確認する。付近から多量の炭化物が出土し、床面に焼けしまりが確認されたことから竈と思われる。埋土から須恵器の坏身、土師器の甕や高坏、椀が出土している。古墳時代（5世紀末～6世紀前半）に位置づけられる。

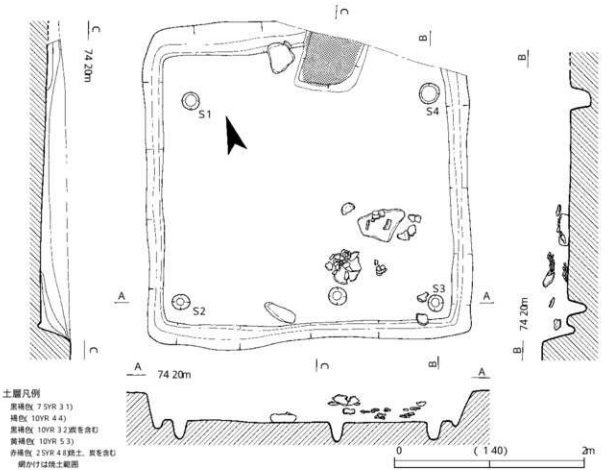


第 9 図　SB1　実測図

（2）掘立柱建物跡（第 11図～ 13図　図版 12・13）

今回の調査では多数の柱穴が確認され、その中から掘立柱建物跡が 40棟復元できた。掘立柱建物跡は全調査区で検出されたが、中でも 2地区（14棟）、4地区（15棟）の比率が高い。建物の時期決定にあたっては、土器小片のみのものについては時期を確定していない。以下代表的な建物について取り上げる。第 11～ 13図に掲載した建物の時期については、出土遺物や周辺遺構との関連から、2・4地区弥生時代中期後半から後期前半、1・3地区 15～ 16世紀に位置づけられる。

ＳＢ 19（第 11図）　2地区中央やや東よりで検出された建物跡で、桁行 1間（2.9m）、梁間 1間（1.9m）、床面積 5．51㎡を測る。主軸方位はＮ 2°Ｅ、ほぼ南北主軸である。柱穴平面形は円形で、掘方断面形状は逆台形を呈する。出土遺物は、SP35・SP17から弥生土器片、SP46から弥生土器の壺が出土している。



第10図　SB4　実測図

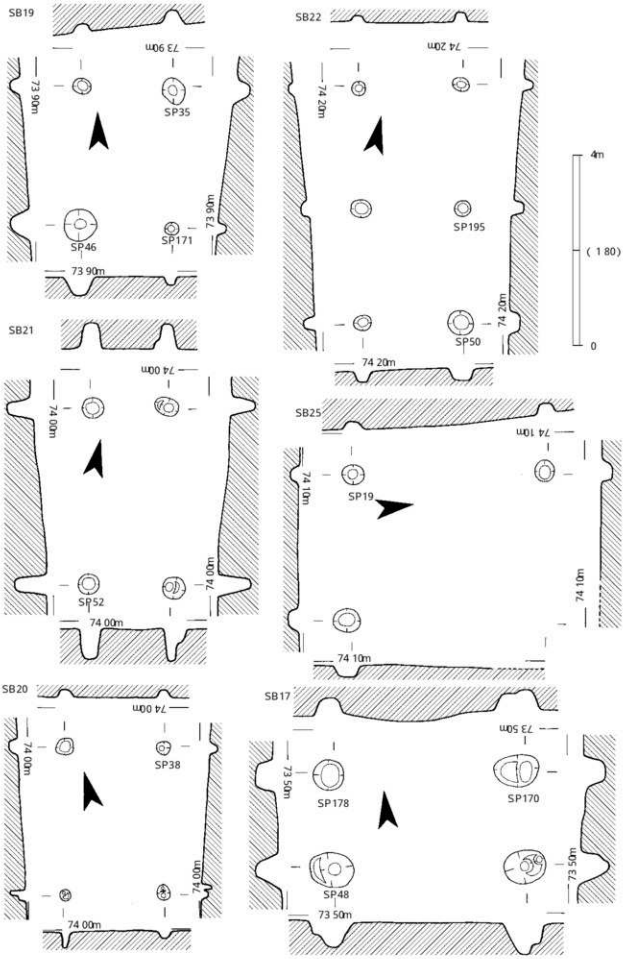
ＳＢ22(第11図)　2地区中央で検出された建物跡で、桁行2間(5.0m)、梁間1間(2.1m)、床面積10.5㎡を測る。主軸方位はＮ-10°-Ｗ、おおむね南北主軸である。柱穴平面形は円形で、掘方断面形状は逆台形を呈する。出土遺物は、SP50、SP195から弥生土器片が出土している。

ＳＢ21(第11図　図版12)　2地区中央で検出された建物跡で、ＳＢ22と隣接(間隔1.5m)する。桁行1間(3.8m)、梁間1間(1.7m)、床面積6.46㎡を測る。主軸方位はＮ-13°-Ｗ、おおむね南北主軸である。柱穴平面形は円形で、掘方断面形状は逆台形を呈する。出土遺物は、SP52(第15図)から弥生土器の壺(第35図　図版32-89)が出土している。

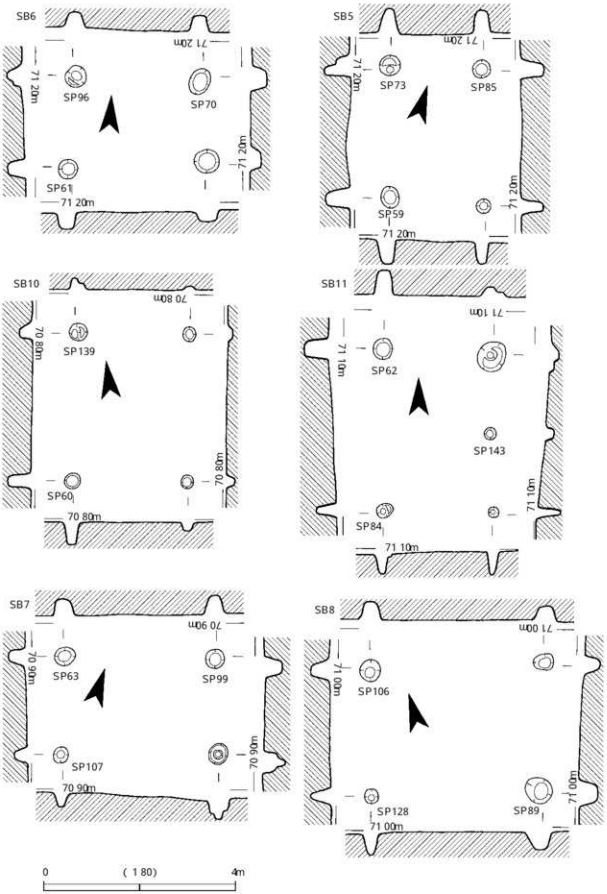
ＳＢ25(第11図)　2地区東端で検出された建物で、桁行1間(4.1m)、梁間1間(3.1m)、床面積12.71㎡を測る。主軸方位はＮ-6°-Ｅ、おおむね南北主軸である。柱穴平面形は円形で、掘方断面形状は逆台形を呈する。出土遺物は、SP19から弥生土器片が出土している。

ＳＢ20(第11図)　2地区中央で検出された建物跡で、ＳＢ21と一部が重なっている。桁行1間(3.1m)、梁間1間(2.1m)、床面積6.51㎡を測る。主軸方位はＮ-13°-Ｅ、おおむね南北主軸である。柱穴平面形は円形で、掘方断面形状は逆台形を呈する。出土遺物は、SP38から弥生土器片が出土している。ＳＢ21との先後関係は不明である。

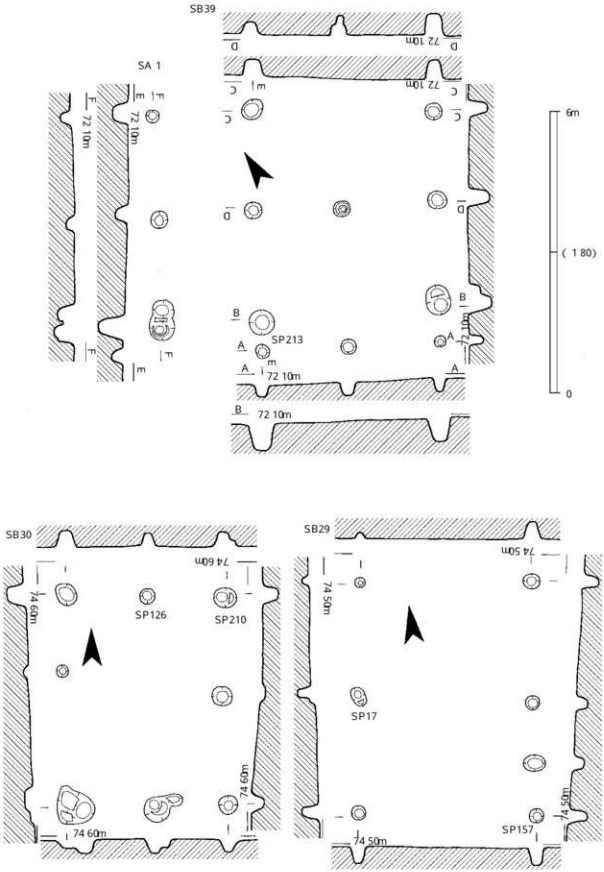
ＳＢ17(第11図)　2地区北側で検出された建物で、桁行1間(4.1m)、梁間1間(2.0m)、床面積8.2㎡を測る。主軸方位はＮ-84°-Ｗである。出土遺物は、SP48、SP170から弥生土器片、SP178から弥



第11図　SB17・19・20・21・22・25実測図



第12図　SB5・6・7・8・10・11実測図



第13図　SB29・30・39，SA実測図

生土器片に加え鉄釘が出土している。

ＳＢ６（第12図　図版12）　4地区中央で検出された建物で、桁行1間（2.9m）、梁間1間（1.9m）、床面積5.51㎡を測る。主軸方位はN-87°-Eである。柱穴平面形は円形で、掘方断面形状は逆台形を呈する。出土遺物は、SP48・SP170から弥生土器片、SP61・SP70・SP96から弥生土器片が出土している。

ＳＢ５（第12図　図版13）　4地区中央東よりで検出された建物で、桁行1間（2.9m）、梁間1間（2.0m）、床面積5.8㎡を測る。主軸方位はN-12°-W、おおむね南北主軸である。柱穴平面形は円形で、掘方断面形状は逆台形を呈する。出土遺物は、SP59・SP73・SP85から弥生土器片が出土している。

ＳＢ10（第12図）　4地区北側で検出された建物で、桁行1間（3.1m）、梁間1間（2.4m）、床面積7.44㎡を測る。主軸方位はN-7°-E、おおむね南北主軸である。柱穴平面形は円形で、掘方断面形状は逆台形を呈する。出土遺物は、SP60・SP139（第14図）から弥生土器片が出土している。

ＳＢ11（第12図）　4地区中央北側よりで検出された建物で、ＳＢ２の南東側に隣接（間隔50cm）する。桁行2間（3.4m）、梁間1間（2.3m）、床面積7.82㎡を測る。主軸方位はN-1°-E、ほぼ南北主軸である。柱穴平面形は円形で、掘方断面形状は逆台形を呈する。出土遺物は、SP62・SP84・SP143から弥生土器片が出土している。ＳＢ２との先後関係は不明である。

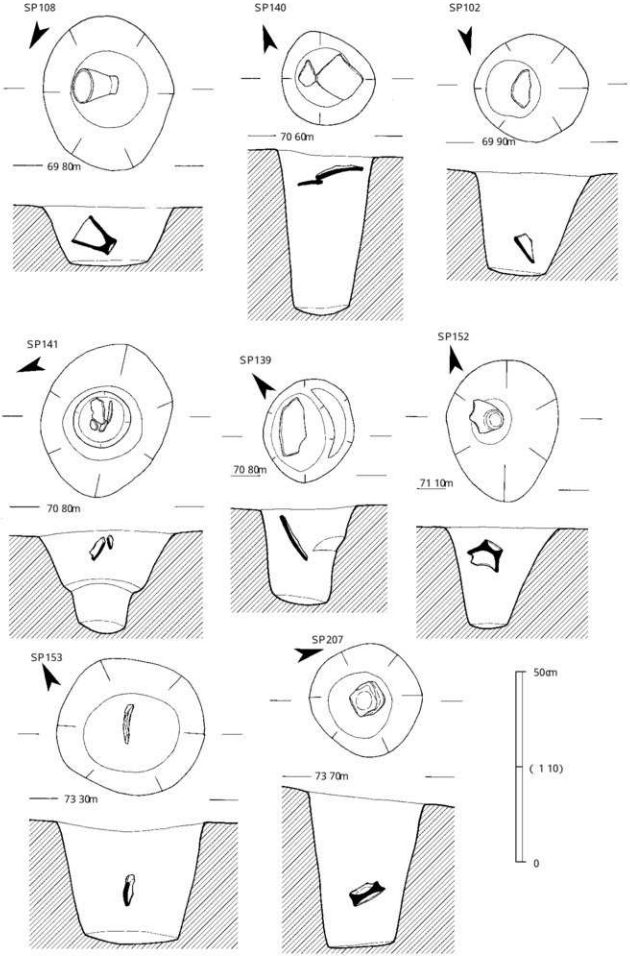
ＳＢ７（第12図　図版12）　4地区北側で検出された建物で、ＳＢ10の南東側に位置し、一部重なっている。桁行1間（3.3m）、梁間1間（2.1m）、床面積6.93㎡を測る。主軸方位はN-73°-Eである。柱穴平面形は円形で、掘方断面形状は逆台形を呈する。出土遺物は、SP63・SP99・SP107から弥生土器片が出土している。ＳＢ10との先後関係は不明である。

ＳＢ８（第12図　図版13）　4地区中央北側よりで検出された建物で、ＳＢ２の南側、ＳＢ６の北側に位置する。桁行1間（3.7m）、梁間1間（2.7m）、床面積9.99㎡を測る。主軸方位はN-72°-Wである。柱穴平面形は円形で、掘方断面形状は逆台形を呈する。出土遺物は、SP89・SP106・SP128から弥生土器片が出土している。ＳＢ２・ＳＢ６との先後関係は不明である。

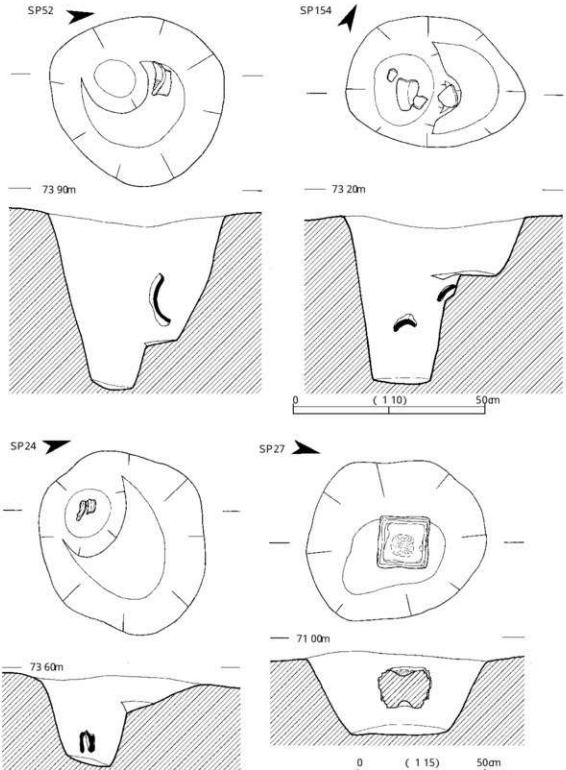
ＳＢ39・ＳＡ１（第13図　図版13）　3地区中央南側よりで検出された柵を伴い庇付きの建物である。桁行2間（5.1m）、梁間2間（3.8m）、床面積19.38㎡を測る。主軸方位はN-34°-Eである。柱穴平面形は円形で、掘方断面形状は逆台形を呈する。出土遺物は、SP213から土師器片、土師質足鍋の足が出土している。住居の北西側に位置する柵の主軸方位はN-33°-Eで、建物との距離は約2mである。柱穴からの出土遺物はないが、方向性、位置から住居に伴う柵と考えられる。

ＳＢ30（第13図）　1地区西側で検出された建物である。桁行2間（4.4m）、梁間2間（3.4m）、床面積14.96㎡を測る。主軸方位はN-3°-Eで、ほぼ南北主軸である。柱穴平面形は円形ならびに不定形で、掘方断面形状は逆台形を呈する。出土遺物は、SP126から弥生土器片、SP210から土師器片が出土している。

ＳＢ29（第13図）　1地区西側で検出された建物で、ＳＢ30の西側に隣接（間隔60cm）する。桁行2間（4.9m）、梁間1間（3.7m）、床面積18.13㎡を測る。主軸方位はN-9°-Eで、おおむね南北主軸である。柱穴平面形は円形で、掘方断面形状は逆台形を呈する。出土遺物は、SP17（第16図）から土師器坏（第35図　図版32　94）、SP157から土師器片が出土している。ＳＢ30との先後関係は不明である。



第 14図　柱穴出土遺物実測図

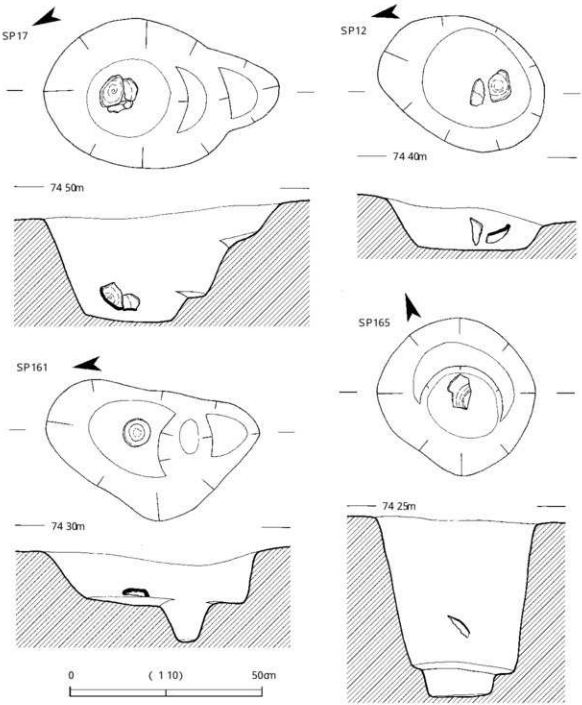


第15図　柱穴遺物出土状況実測図

(3) 柱穴（第14図～16図　図版20・21）

今回の調査では、調査区の広い範囲で掘立柱建物を構成するものを含んだ、約1500個の柱穴が検出され、そのうち6分の1程度の柱穴から遺物が出土している。以下、遺物の出状図面を掲載した代表的なものを取り上げる。

ＳＰ108（ＳＢ13）からは手捏ね土器（弥生時代中期後半）、ＳＰ140・102・141からは弥生土器の甕、



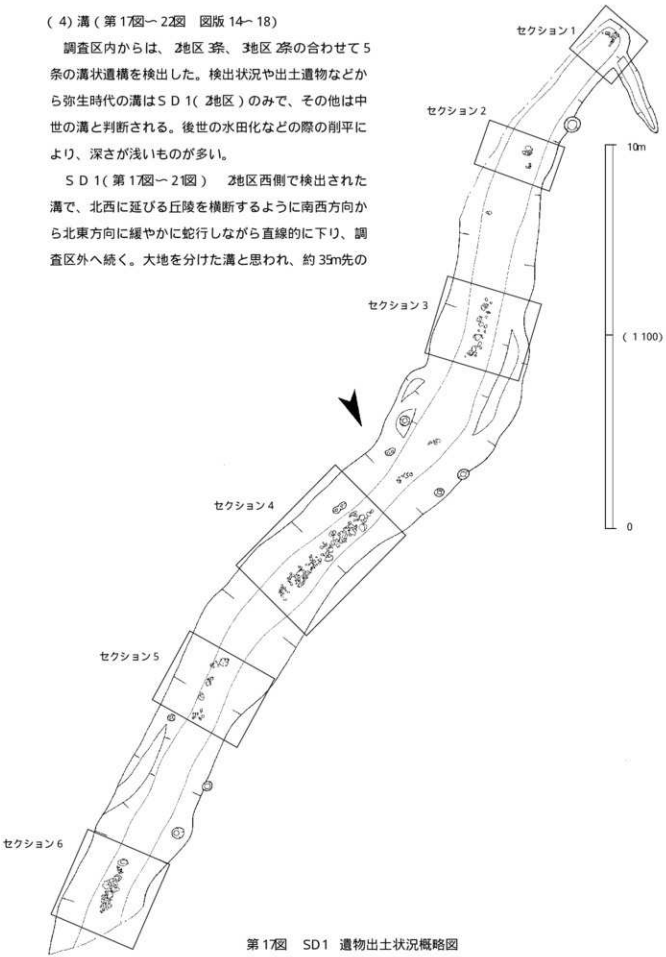
第16図　柱穴遺物出土状況実測図

ＳＰ139(ＳＢ10)・153からは弥生土器の壺、ＳＰ152(ＳＢ13)・207からは壺の底部（弥生時代中期後半）が出土した。ＳＰ52(ＳＢ21)・24(ＳＢ31)からは壺の頸部（弥生時代中期後半）、ＳＰ154(ＳＢ34)からは弥生土器の壺の口縁、ＳＰ27からは宝篋印塔（室町時代後半）の笠の部分が逆さまに出土した。ＳＰ27の南側（調査区外）に「ダイジョウジ」いう屋号をもつ家があり、僧侶の墓石が柱穴にはまり込んで検出された可能性が高い。ただ後世に礎石として再利用した可能性も否定はできない。ＳＰ17(ＳＢ29)・12 165からは土師器坏、ＳＰ161(ＳＢ28)からは土師器皿、いずれも15～16世紀に位置づけられる。

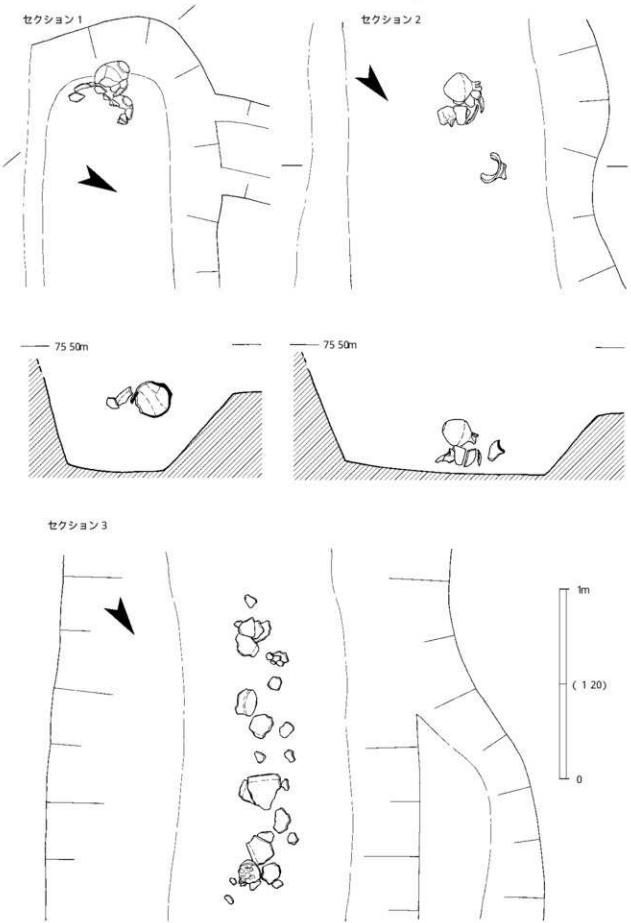
（4）溝（第17図～22図　図版14～18）

調査区内からは、2地区3条、3地区2条の合わせて5条の溝状遺構を検出した。検出状況や出土遺物などから弥生時代の溝はＳＤ1（2地区）のみで、その他は中世の溝と判断される。後世の水田化などの際の削平により、深さが浅いものが多い。

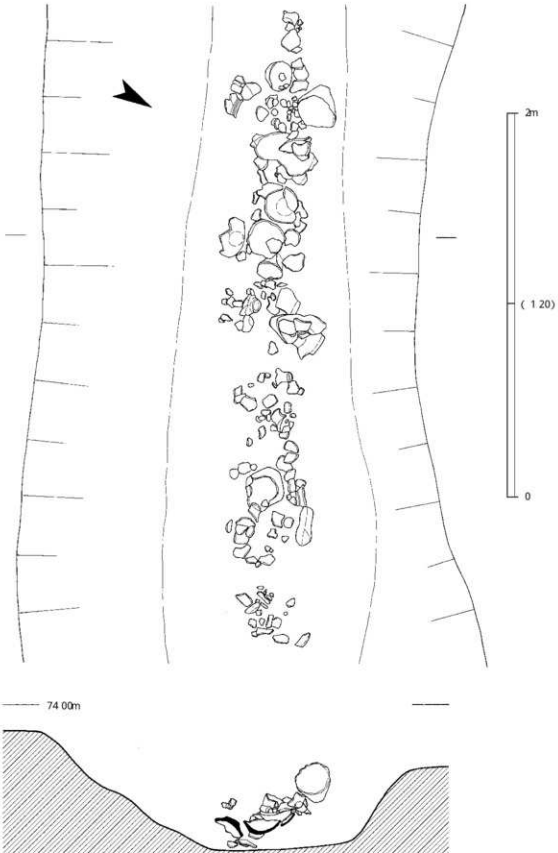
ＳＤ1（第17図～21図）　2地区西側で検出された溝で、北西に延びる丘陵を横断するように南西方向から北東方向に緩やかに蛇行しながら直線的に下り、調査区外へ続く。大地を分けた溝と思われ、約35m先の



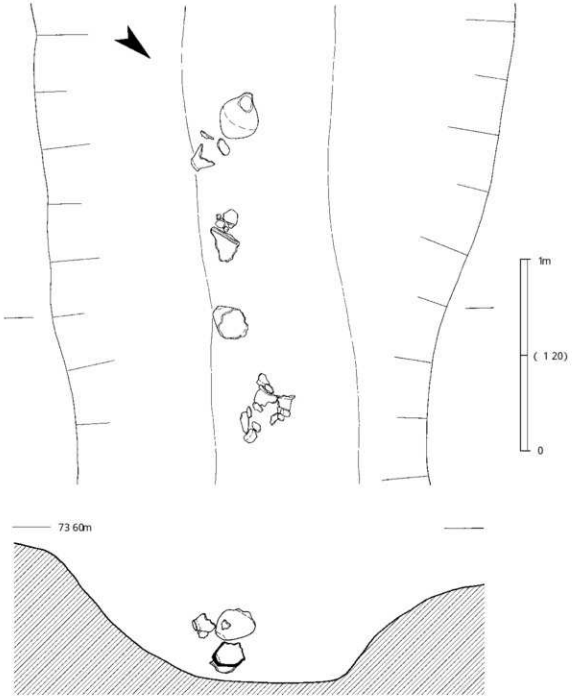
第17図　SD1　遺物出土状況概略図



第18図　SD1　セクション1・2・3　遺物出土状況実測図



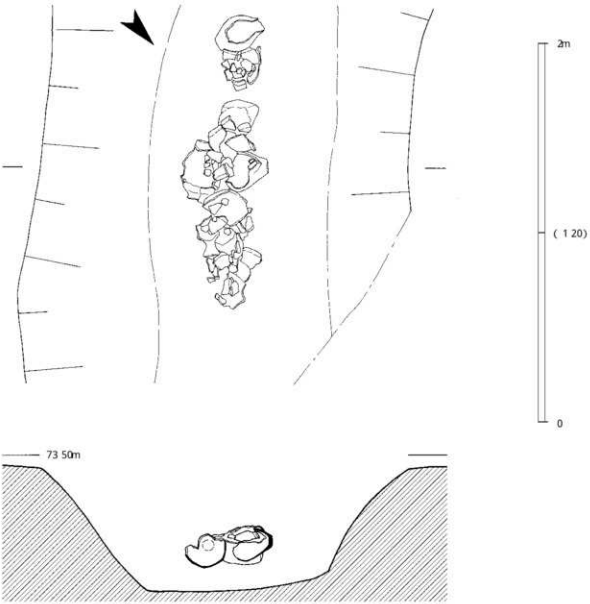
第19図　SD1　セクション4遺物出土状況実測図



第20図　SD1　セクション5遺物出土状況実測図

北側谷筋へ延びているものと考えられる。現存規模は、長さ29m、幅1 9m〜3 1m、深さ32cm〜84cm、U字型の断面形をもつ。標高の高い南側ほど削平が激しく、南端の深さは検出面より32cmであった。

また、南側東壁約6mは調査区に切られ、上場を確認できなかった。溝全体から遺物は出土しているものの、出土量には場所によって偏りがあり、一度にある程度まとまった量の土器を投げ込んだ可能性が高い。また、溝内外より検出された柱穴から橋や柵等の可能性を検証してみたが、結論には至らなかった。埋土中より完形に近いものを含む弥生土器（23〜78）、土製品（79）、打製石鏃（123）、敲石（115）、凹石（116）などが多数出土した。弥生時代中期後半から後期前半を中心とする時期と位置づけられる。

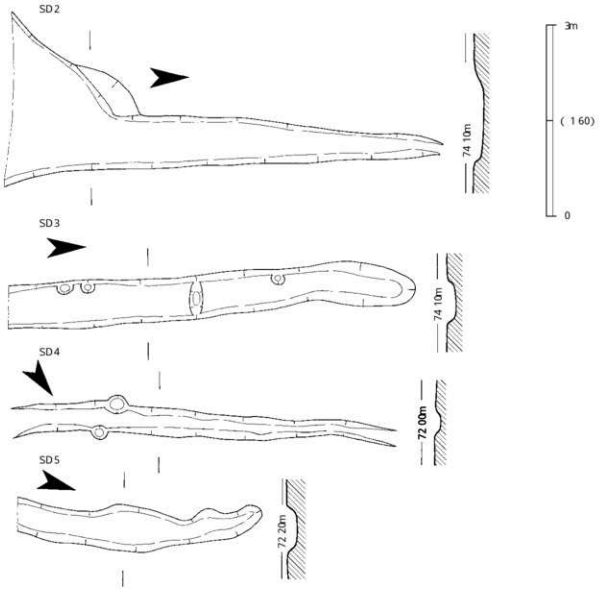


第21図　SD1　セクション6遺物出土状況実測図

ＳＤ２(第18図)　2地区やや東側に位置し、南から北へ下る。南端は調査区外へ延び、北端は調査区中央付近で終息する。南北方向に69m、幅35cm～84cm(直線部分)・最大276cm、深さ約12cmの浅い遺構である。水田化の際の削平が顕著で、埋土中より土師器片、土師質の擂鉢が出土しているが、出土遺物が少なく、用途や他の遺構との関連は不明である。中世の溝と考えられる。

ＳＤ３(第18図)　2地区ほぼ中央で検出された溝で、ＳＤ２の西側約2mのところに位置する。南から北へ下り、南端は調査区外へ延び、北端は調査区中央付近で終息する。南北方向に66m、幅55cm～72cm、深さ約15cmの浅い遺構である。水田化の際の削平が顕著で、埋土中より土師器片が出土しているが、出土遺物が細片で量も少なく、用途や他の遺構との関連は不明である。方向性がＳＤ２とほぼ一致することから、同時期の可能性が高い。

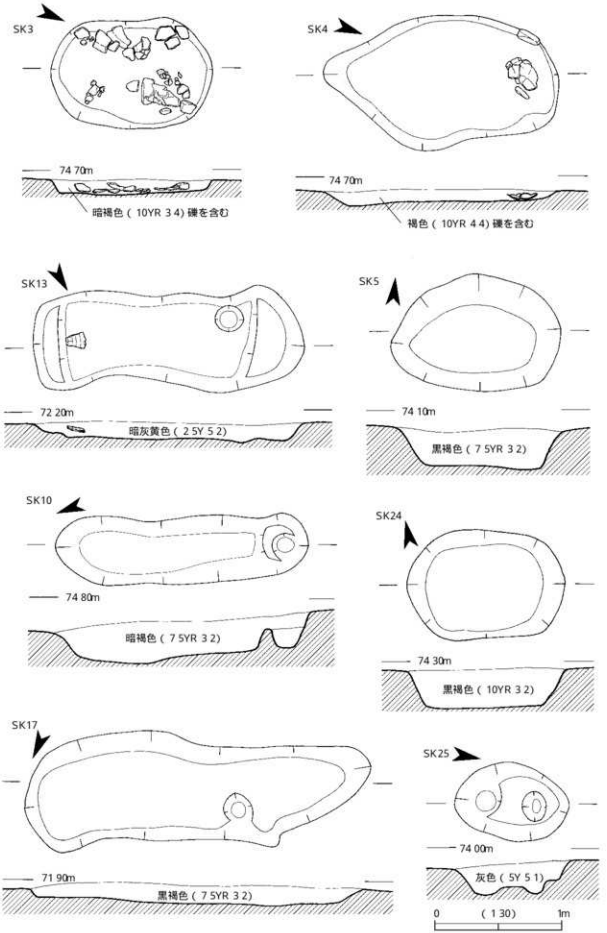
ＳＤ４(第18図　図版18)　3地区北側で検出された溝で、南東から北西に緩やかに下る。水田化の際の削平が顕著で、長さ61m、幅27cm～51cm、深さ8cm(最大)と、非常に浅い遺構である。埋



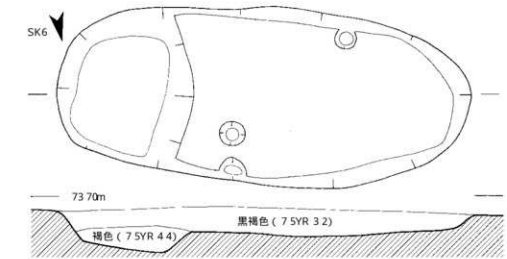
第22図　SD2～5　実測図

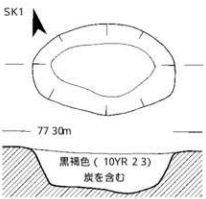
土中より土師器坏、瓦質土器片が出土している。中世の溝と考えられる。

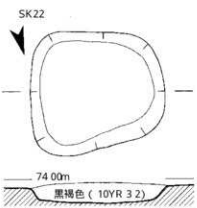
ＳＤ５（第18図）　3地区東端で検出された溝で、南から北へわずかに下る（標高差5cm）。南端は調査区外へ延び、北端は調査区内で終息する。南北方向に３9m、幅30cm～70cm、深さ約15cmの浅い遺構である。水田化の際の削平が顕著である。埋土中より土師器片が出土しているが、出土遺物が細片で量も少なく、用途や他の遺構との関連は不明である。中世の溝と考えられる。

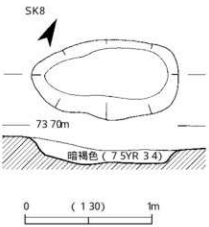

SK3
74 70m
暗褐色（10YR 3 4）礫を含む
SK4
74 70m
褐色（10YR 4 4）礫を含む
SK13
72 20m
暗灰黄色（2 5Y 5 2）
SK5
74 10m
黒褐色（7 5YR 3 2）
SK10
74 80m
暗褐色（7 5YR 3 2）
SK24
74 30m
黒褐色（10YR 3 2）
SK17
71 90m
黒褐色（7 5YR 3 2）
SK25
74 00m
灰色（5Y 5 1）
0
（1 30）
1m

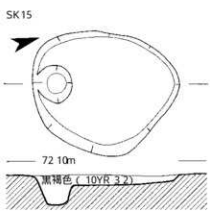
第23図　SK 実測図











第24図　SK　実測図

（5）土坑（第23図～25図図版 18・19）

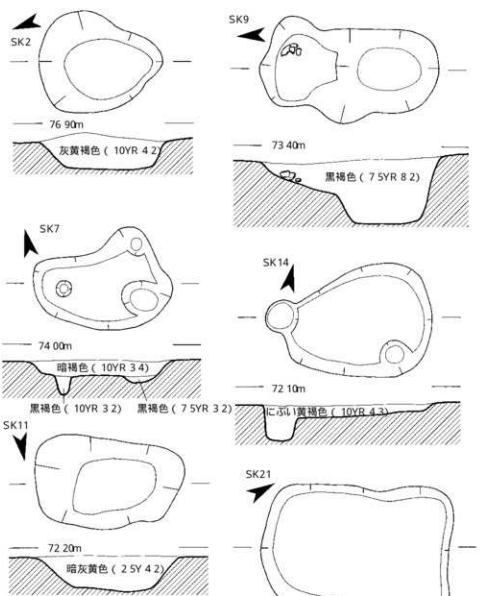
今回の調査では22基の土坑が確認され、平面形は円形が3基、長円形が6基、隅丸長方形が6基、不整形が7基であった。

出土遺物から中世のものが多いが、遺物を伴わない土坑も10基と多く検出された。規模は小型で浅いものが多く、埋土も単層のものが多い。

以下、代表的なものを取り上げる。

ＳＫ3（第23図　図版 18）　Ⅶ地区東側で検出され、平面形は長円形をなす。規模は、長軸 129cm、短軸 84cm、残存する深さ 11cmの小規模の土坑である。埋土・地山いずれも礫を多く含み、掘方の確認しにくい土坑である。埋土中から弥生土器（80・81、83～85）が出土した。弥生時代終末期の土坑と考えられる。

ＳＫ4（第23図　図版 18）　Ⅶ地区東側でＳＫ3の西側に



第25図　SK　実測図

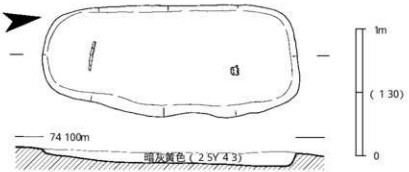
隣接して検出された。平面形は不整形をなす。規模は、長軸186cm、短軸107cm、残存する深さ11cmの中規模の土坑である。埋土・地山いずれも礫を多く含み、掘方の確認しにくい土坑である。埋土中から弥生土器（82）が出土した。弥生時代終末期の土坑と考えられる。

ＳＫ13（第23図　図版18）

3地区中央で検出され、平面形は不整形をなす。規模は、長軸215cm、短軸81cm、残存する深さ13cmの中規模の土坑である。東西の両端がテラス状に一段高く、4cm前後の比高差がある。埋土中から土師器擂鉢（104）が出土した。中世の土坑と考えられる。

ＳＫ7（第25図　図版19）　2地区中央で検出され、平面形は不整形をなす。規模は、長軸110cm、短軸83cm、残存する深さ12cmの小規模の土坑である。床面に大小3個の柱穴を確認する。埋土中から土師器坏（88）が出土した。ＳＤ3とＳＫ10と隣接するが、ＳＫ10からは出土遺物がなく、ＳＤ3の遺物も細片で量が少ないことから周辺遺構との関連は不明である。中世の土坑と考えられる。

ＳＫ23（第25図　図版19）　1地区西側で検出され、平面形は円形をなす。規模は、長軸102cm、



短軸93cm、残存する深さ30cmの小規模の土坑である。埋土中から土師器坏(87)が出土した。SB29の床内に位置するが、関連は不明である。中世の土坑と考えられる。

以下土坑は一覧表にて示す。

第26図　ST1　実測図

第1表　土坑一覧表

	平面形	規模(長軸×短軸×深さ)	出土遺物	時　期	備　考
SK1	長円形	113cm　72cm　31cm	土師器片　瓦質土器(足鍋)	中世	
SK2	不整形	99cm　81cm　23cm	なし	不明	
SK3	長円形	129cm　84cm　11cm	弥生土器(甕)	弥生時代終末期	埋土に礫含む
SK4	不整形	186cm　107cm　11cm	弥生土器(甕)	弥生時代終末期	埋土に礫含む
SK5	長円形	135cm　93cm　29cm	なし	不明	
SK6	長円形	327cm　141cm　33cm	土師器片	中世	テラス付き
SK7	不整形	110cm　83cm　12cm	土師器(皿、坏)	中世	床面柱穴3個
SK8	隅丸長方形	116cm　63cm　15cm	なし	不明	
SK9	不整形	141cm　75cm　51cm	土師器片　弥生土器片	中世	テラス付き
SK10	隅丸長方形	201cm　53cm　27cm	なし	不明	
SK11	隅丸長方形	117cm　69cm　25cm	なし	不明	
SK12					欠番
SK13	不整形	215cm　81cm　13cm	土師器(擂鉢)	中世	両端テラス付き
SK14	不整形	132cm　91cm　10cm	なし	不明	床面柱穴2個
SK15	円形	110cm　96cm　8cm	なし	不明	床面柱穴1個
SK16	隅丸長方形	117cm　63cm　22cm	なし	不明	床面柱穴2個
SK17	不整形	276cm　87cm　12cm	土師器(皿)	中世	床面柱穴1個
SK18					欠番
SK19	円形	65cm　64cm　35cm	なし	不明	テラス付き
SK20					欠番
SK21	隅丸長方形	147cm　101cm　15cm	土師器片　瓦質土器片	中世	
SK22	隅丸長方形	105cm　97cm　12cm	なし	不明	
SK23	円形	102cm　93cm　30cm	土師器(坏)	中世	
SK24	長円形	123cm　87cm　30cm	土師器片	中世	
SK25	長円形	90cm　63cm　18cm	土師器片　弥生土器片	中世	床面柱穴2個

(6) 埋葬遺構(第26図)

今回の調査では1基の埋葬遺構が検出された。

ST1(第26図　図版19)　2地区東よりで検出された埋葬遺構で、ほぼ南北主軸をとる。平面形は隅丸長方形である。規模は長軸207cm、短軸89cm、深さ9cmを測る。水田化の際の削平を受けており、遺構は浅い。南側床面から漆塗木製品、北側埋土中から土師器台付皿(86)が出土している。木製品は腐食が激しく、用途は不明である。隣接するSK22やSD2より時期が古く、13世紀前半に位置づけられる。

2 遺 物

調査の結果、遺構及び遺物包含層から弥生土器、土師器を主体として、須恵器、土製品、瓦質土器、輸入磁器、石製品、鉄製品、木製品などの遺物が出土した。

（1）土器・土製品（第27図～36図）

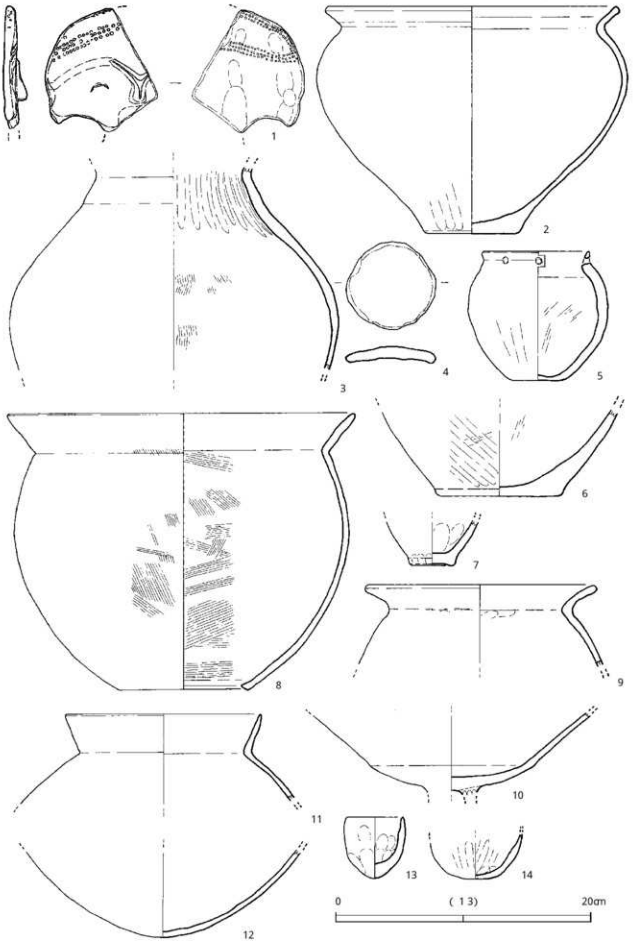
1～4はＳＢ3からの出土遺物で、時期は弥生時代後期前半と考えられる。1は円形の分銅形土製品である。眉と鼻は粘土帯を貼り付けて表現し、目は爪あるいは爪状施文具による刺突によって表現されている。頭髪を表現したと思われる装飾として、表上部に3列の竹管による刺突文、裏上部に2列と3列、上部側面にも1例の刺突文を施す。鼻の穴も刺突により表現される。表面眉より下は赤味を帯びている。上半部左側のみの残存であるが、その表情から明地遺跡（82）のものとよく似ている。2は胴部が強く張った鉢である。口縁部は「く」の字状に屈曲する。口縁部内外面に稜をもつ。底部は安定した平底である。3は壺の体部片である。頸部内面に指ナデ痕が顕著である。4は土器片を円形に加工した土製品である。

5～7はＳＢ2からの出土遺物で、時期は弥生時代後期前半と考えられる。5は小型の壺で、頸部に4カ所焼成前の穿孔が認められる。6は壺の底部片である。外面はハケ後ナデ調整を施す。7は手捏ね土器の底部片で、わずかに上げ底である。

8～14はＳＢ1からの出土遺物で、時期は弥生時代終末期と考えられる。8は甕である。内外面ハケ調整を施す。底部に直径9cmの穿孔をもつ。甑としての利用以外に、穿孔が大きいことから祭祀具として利用された可能性がある。9は甕の口頸部片である。口縁部は「く」の字状に屈曲し開く。内外面ハケ調整を施す。10は高坏体部片である。口縁部は欠失する。体部の中位に強い稜をもつ。器面剥落のため調整は不明である。11は胴部が強く張った甕の口頸部片である。口縁端部は尖り気味に終わる。12は甕の底部片である。13・14は手捏ね土器である。13は内外面指頭の痕が顕著である。14は内外面ヘラミガキを施す。

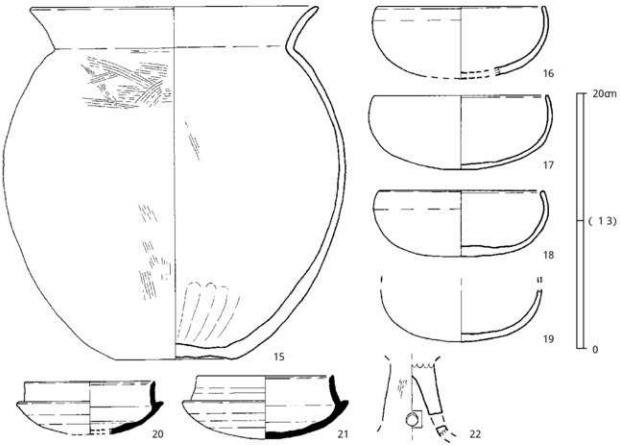
15～22はＳＢ4からの出土遺物で、22以外の時期は古墳時代（5世紀末～6世紀初）と考えられる。15は土師器の甕である。内外面ハケ後ナデ調整を施す。内面底部にヘラケズリが確認される。外面底部は剥落している。16～19は土師器の椀である。いずれも、内外面黒褐色で胎土に雲母を多く含む。18の外面底部はヘラミガキを施す。20・21は須恵器坏身である。外面底部から受部付近までは回転ヘラケズリ、内面底部は静止ナデ、それ以外は回転ナデによる調整を施す。22は弥生時代後期の高坏の脚部片である。スカート状に開き、中位下に円形の透かしがある。流れ込みによる遺物と考えられる。

23～79はＳＤ1からの出土遺物で、時期は弥生時代中期後半から後期前半と考えられる。23～43はすべて壺である。23～28・30は口縁端部を上下に肥厚する。23～28は口縁に2条の凹線文を施す。23は頸部に2条の貼り付け突帯が廻り、下側は指頭による連鎖突帯である。24の頸部は直線的に内傾し、口縁部は大きく開く。頸部に5条の沈線が廻る。25の口縁部は「く」の字に屈曲し大きく開く。口縁端部はわずかに下に垂れる。頸部に3条の凹線文を施す。26の頸部は直立し、口縁部は緩やかに外反する。頸部に3条の沈線が廻る。27の頸部は直線的に内傾し、口縁は大きく開く。口縁端部はわずかに下に垂れる。頸部に4条の凹線文が廻る。28の頸部は直線的に内傾し、口縁部は屈曲し短く開く。



1~4: SB3, 5~7: SB2, 8~14: SB1

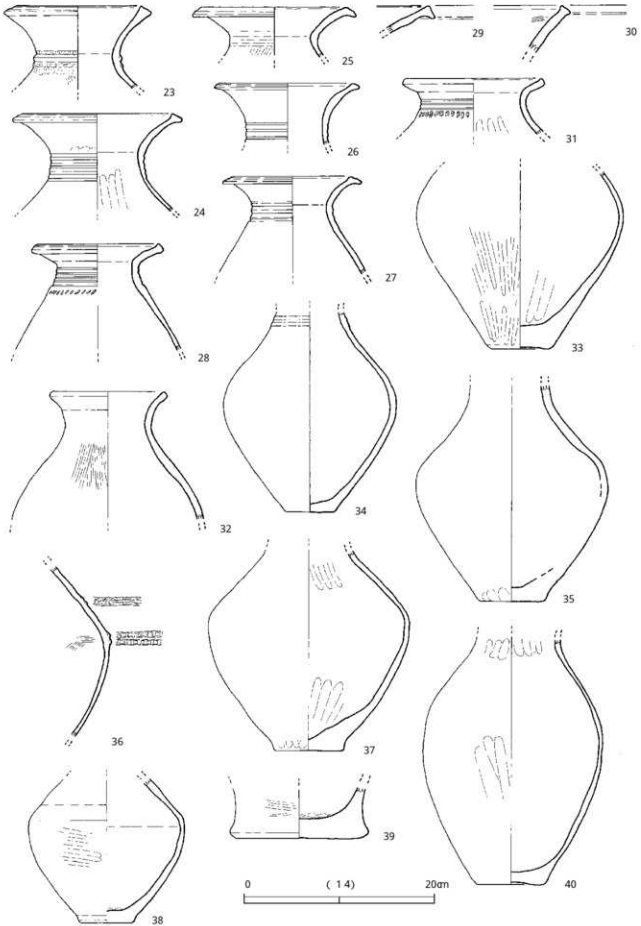
第27図　SB1・2・3出土土器実測図



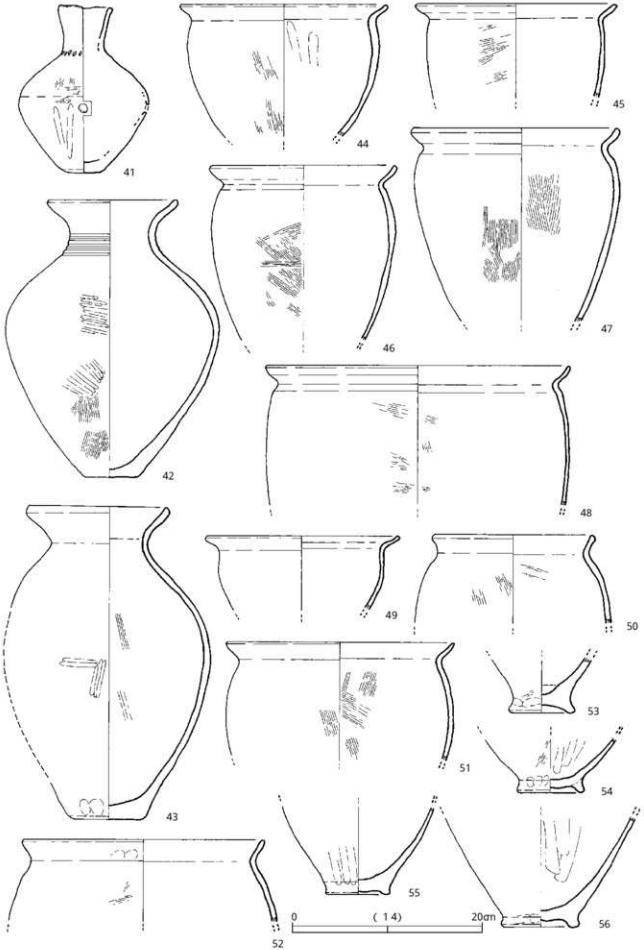
第28図　SB4　出土土器実測図

頸部に5条の沈線が廻る。沈線の下にヘラ状工具による刺突文が廻る。29は壺の口縁部で強く開き、口縁端部は下に垂れる。31の口縁部は短く外反する。頸部に3条の沈線が廻る。沈線の下にヘラ状工具による刺突文を施す。32の口縁は緩やかに外反し、口縁端部をわずかに肥厚する。外面はハケ調整を施し、内面は器面の剥落が激しく調整不明である。33の胴部中位が強く張り、底部はわずかに上げ底である。外面はヘラミガキ、内面はヘラケズリが確認できる。34、35、37、38は胴部中位が強く張る。34は頸部に2条の貼り付け突帯が廻る。内外面ナデ調整、。37は内面下位にヘラケズリを確認する。38は体部片である。胴部と肩部にそれぞれ2条の貼り付け突帯が廻る。突帯には貝の背またはヘラ状工具による刻みを施す。内面ハケ調整、外面ナデ調整。38の外面中位にヘラミガキを確認する。39は底部片で、安定した平底である。外面ハケ調整、内面底部に指頭圧痕を確認する。40の胴部の張りは小さく、底部はわずかに上げ底である。器面の剥落が激しい。41は、小型の細頸壺である。外面頸部にヘラ状工具による刺突文が廻る。胴部中位に穿孔がみられるが、焼成前か後かは不明。内面口縁付近ナデ調整、外面ハケ後ヘラミガキによる調整を施す。底部は丸味のある平底である。祭祀土器の可能性が高い。42は胴部上半部が強く張る。頸部に5条の沈線が廻る。内面ナデ調整、外面ハケ後ヘラミガキによる調整を施す。43は胴部の張りが緩やかで底部は厚い。内面ハケ調整、外面ハケ後ヘラミガキによる調整を施す。

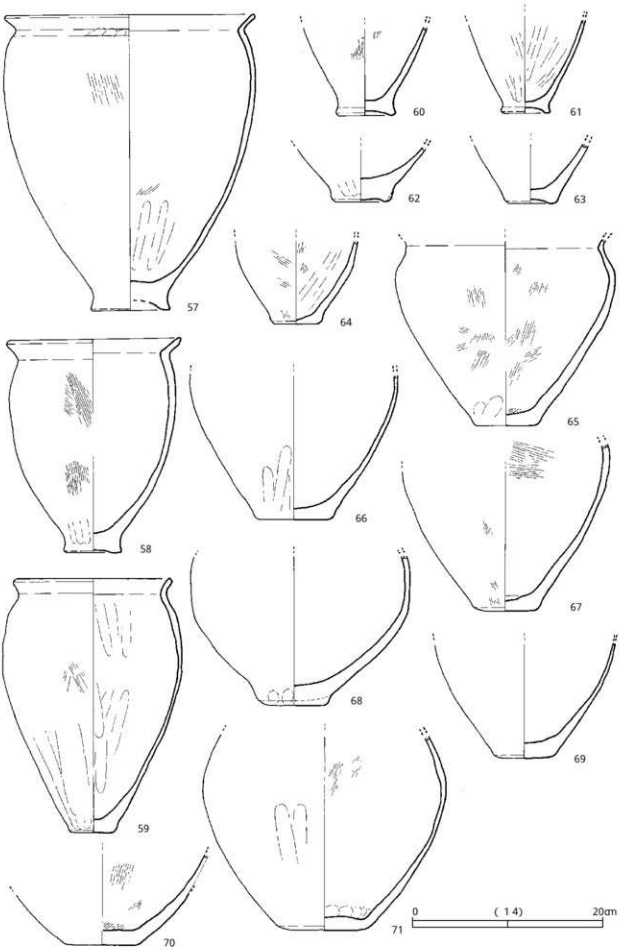
44～52はすべて甕の口胴部片で口縁端部を拡張したり凹線文を施したものは確認されていない。44～49の口縁部は屈曲後、内湾気味に立ち上がる。胴部は全体に張り気味に丸くつくられ、50～52は



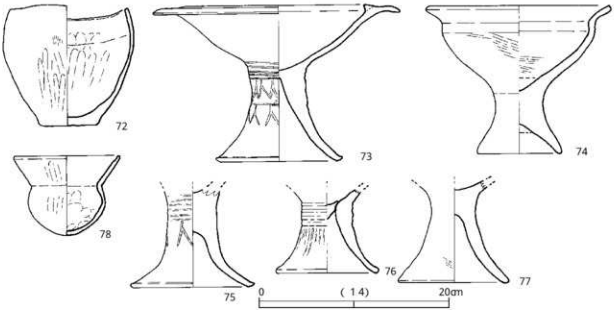
第29図　SD1　出土土器実測図



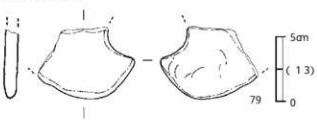
第30図　SD1　出土土器実測図



第3図　SD1　出土土器実測図

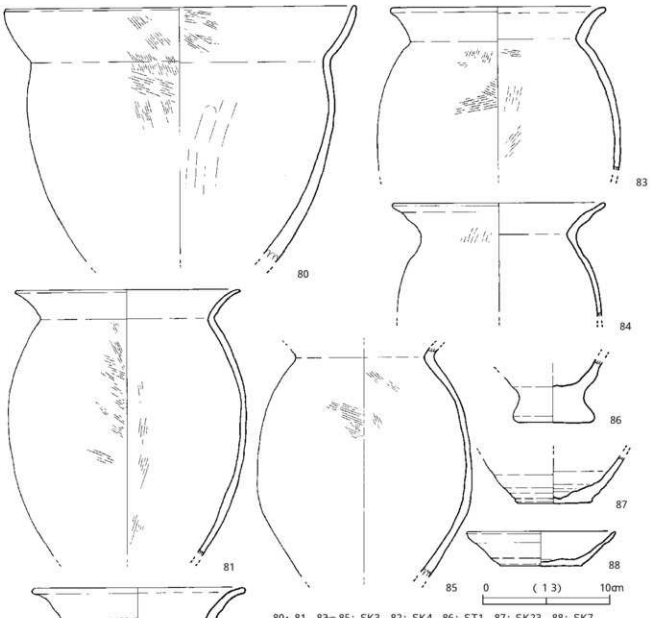


第32図　SD1　出土土器実測図



第33図　SD1　出土土製品実測図

特に強く最大径は胴部にある。44～46は外面ハケ、内面ハケ後ナデ調整を施す。47・48は内外面ともハケ調整を施す。49は器面剥落のため調整不明である。50・52の口縁部は緩やかに屈曲し、端部は丸く終わる。外面ハケ調整を施す。51の口縁部は緩やかに屈曲し、端部は丸く終わる。内外面ハケ調整を施す。53～56は壺または甕の底部片である。いずれも底部は上げ底である。55は外面に、54・56は内面にヘラケズリが認められる。53・54の外面はナデ調整を施す。57・58は肩部の張りの弱い甕で口縁部は緩やかに屈曲する。底部は上げ底、外面はハケ調整を施す。57は内面下半部にヘラケズリを施す。59は肩部の張りの弱い甕で口縁部は緩やかに外反する。底部は平底である。内面と外面下半部にヘラケズリを施す。60・61は甕、62～64・66・67・69～71は壺、65・68は鉢である。底部は、60～63は上げ底、64～71の平底は概ね角のとれた丸味のあるつくりである。61は内外面ヘラミガキ、60・65・67は内外面ハケ調整を施す。64は外面ハケ、内面ハケ後ヘラケズリによる調整を施す。62・66の外面下部にヘラケズリを施す。70・71は内面ハケ調整、71の外面中位に指ナデ痕有り。72は鉢で、内湾する口縁部をもつ。内面ヘラケズリ、外面ハケ後ヘラミガキ調整を施す。底部は平底である。73～77は高坏である。75～77は坏部は欠失する。73は坏部は浅く、口縁端部内側を「Ｔ」字状に拡張する。は脚部にヘラ状工具による矢羽形の透かしが2段、79は1段施される。73はその上に5条、間に1条、79はその上に6条の凹線文が廻る。74は坏部が深く、台付鉢とも考えられる。口縁部は緩やかに外反する。脚部は短脚である。坏部内外面ハケ調整を施す。76は坏部と脚部の境に7条の凹線文が廻る。77の脚部はスカート状に開き、外面はハケ調整を施す。78は小型の丸底壺（坩）である。口縁部は「く」の字に屈曲し直線的に開き、尖り気味に終わる。外面ナデ調整後ヘラミガキを施す。内面に指頭圧痕がみられる。ＳＤ１の他の土器より時期が下り、時期は古墳時代初頭と考えられる。79は分銅形土製品である。1より一回り小さ

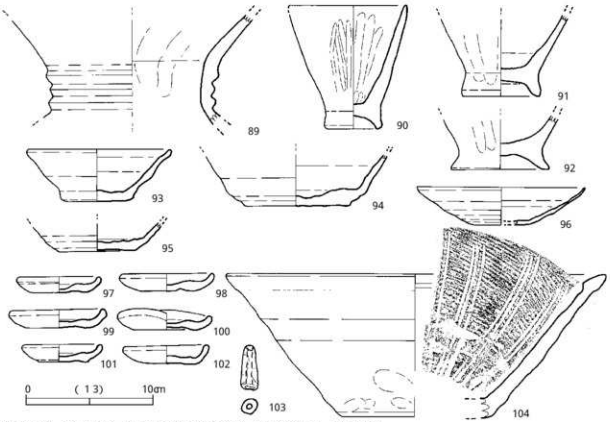


80・81、83～85：SK3、82：SK4、86：ST1、87：SK23、88：SK7

く、穿孔・装飾をもたない。下半部と考えられる。

80・81、83～85はＳＫ３、82はＳＫ４からの出土遺物で、時期は弥生時代終末期と思われる。80は鉢で、口縁部は「く」の字に屈曲後内湾気味に立ち上がる。口縁端部は丸く終わる。外面および内面口縁部にナデ調整、内面中位にヘラケズリを施す。81～84の口縁部は「く」の字に屈曲後、外反気味に開き、端部は丸く終わる。81～83・85の胴部はやや張るもラグビーボールを縦にしたような長胴形を呈する。底部は欠失する。内外面ハケ調整を施す。82の内面体部にヘラミガキを施す。86はＳＴ１から出土した土師器台付皿の底部片である。底部は回転糸切り、内外面回転ナデ調整を施す。時期は13世紀と考えら

第34図　SK・ST　出土土器実測図

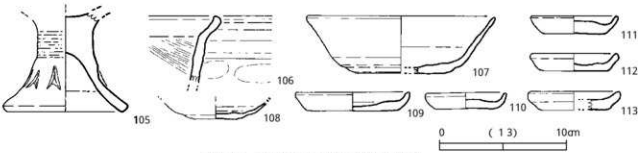


89：SP52、90：SP108、91：SP152、92：SP207、93・95：SP12、94：SP17、
96：SP165、97～101：SP209、102：SP161、103：SP220、104：SK13

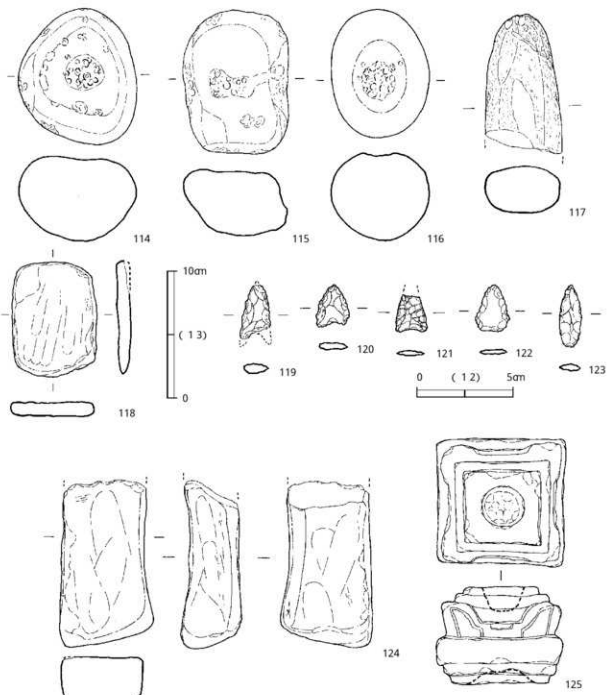
第35図　SK・SP出土土器・土製品実測図

れる。87はＳＫ23から出土した土師器坏である。内外面回転ナデ調整を施す。底部は回転糸切り後の板目痕が残る。胎土に雲母を多く含む。時期は13世紀と考えられる。88はＳＫ7から出土した土師器坏である。内外面回転ナデ調整を施す。底部は回転糸切り後の板目痕がかすかに残る。時期は15世紀と考えられる。

89～104は柱穴からの出土遺物で、時期は弥生時代から中世までと幅広い。89はＳＰ52から出土した壺の頸部片で、上下は欠失する。頸部は縦方向に立ち上がり外反する。3条の貼り付け突帯が廻り、器壁は厚い。90はＳＰ108からの出土遺物で、小型の鉢である。直口口縁をもち口縁部は外傾する。底部は上げ底で、内外面入念に磨き調整を施す。91はＳＰ152、92はＳＰ207から出土した底部片である。いずれも底部は上げ底で、外面下位にヘラケズリを施す。これら4点は、弥生時代中期後半ないしは後期前半の所産と考えられる。93・95はＳＰ12、94はＳＰ17、96はＳＰ165から出土した土師器坏である。いずれも底部回転糸切り、内外面回転ナデ調整を施す。93の体部は内湾して立ち上がり、口縁付近で外反する。94の体部は内湾して立ち上がり、体部中位で外反して直線的に延び、口縁部は欠失する。胎土に雲母を多く含み、外面底部には糸切り後の板目痕が残る。95の体部は内湾して立ち上がるがその後は欠失する。胎土に雲母を多く含む。これらの時期は13世紀と考えられる。96の体部は内湾気味に立ち上がり、直線的に延び、口縁端部はやや内側に納める。前述の坏と比べて器壁が薄い。時期は16世紀と考えられる。97～101はＳＰ209、102はＳＰ161からの出土遺物で、すべて土師器皿である。いずれも内外面回転ナデ調整を施し、底部は回転糸切りである。胎土に雲母を多く含み、97～102は指頭圧による底部内面の凹みが顕著である。時期は13世紀と考えられる。103はＳＰ220から出土した外面に指頭圧痕が残る土師質の管状土錘である。時期は不明である。104

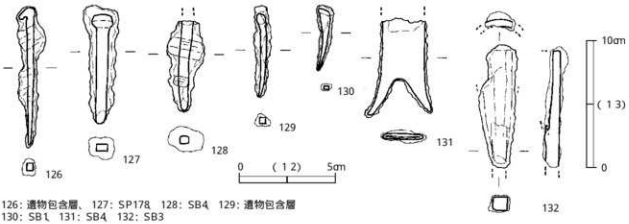


第36図　遺物包含層出土土器実測図



114: SB3、115・116: SD1、117: 遺物包含層、118: SP109
119～122: SB2、123: SD1、124: SB1、125: SP27

第37図　石製品実測図



126: 遺物包含層、127: SP178、128: SB4、129: 遺物包含層
130: SB1、131: SB4、132: SB3

第38図　鉄製品実測図

はＳＫ13から出土した土師質の擂鉢である。内面に3本を単位とする卸目をもつ。外面はハケ調整後ナデで消している。外面下位に指頭圧痕が残る。時期は16世紀と考えられる。

105～113は遺物包含層からの出土遺物で、時期は弥生時代から中世までと幅広い。105は高坏の脚部で、坏部は欠失する。坏部と脚部の境に9条の凹線文を施す。脚部中位にはヘラ状工具により矢羽形の透かしを施す。脚部はスカート状に開く。時期は弥生時代中期後半ないしは後期前半と考えられる。106は瓦質土器の鍋の口縁部片である。内面ハケ調整、外面はハケ後ナデで消している。外面体部に指頭圧痕が残る。107・108は土師器坏である。いずれも底部回転糸切りで、内外面回転ナデ調整を施す。107の体部は内湾して立ち上がり体部中位で外反して直線的に延びる。108の体部は内湾気味に立ち上がり、その後欠失する。器壁は薄い。109～113は土師器皿で、いずれも底部回転糸切りで、内外面回転ナデ調整を施す。

114はＳＢ3、115はＳＤ1から出土した叩き石である。大きな窪みは上面の一方向である。114は側縁の2カ所、115は3方向に敲打痕を確認する。石材はいずれも花崗岩である。116はＳＤ1から出土した凹石で、表面を横方向に入念に研磨している。使用痕は上面の一方向で、石材は玄武岩である。117は遺物包含層から出土した打製石斧で、石材は塩基性変成岩または角閃岩である。118はＳＰ109から出土した扁平片刃石斧で、ほぼ完形で出土した。石材は結晶片岩または緑色片岩である。119～122はＳＢ2、123はＳＤ1から出土した打製石鏃である。119～121は凹基無茎式、122は平基無茎式、123は柳葉形石鏃である。石材は119・120・123はサヌカイト、121は腰岳周辺産黒曜石、122はチャートである。124はＳＢ1の中央ピットから出土した砥石である。3方向で使用痕を確認する。石材は砂岩である。125はＳＰ27から出土した宝篋印塔の笠で、石材は安山岩である。笠の高さ15.1cmから石塔の高さを推定すると1m未満の可能性が高い。規模や形から推察すると、時期は供養塔ではなく墓標として使われ出す室町時代中期以降と考えられる。

126～130は鉄釘で、断面は方形を呈する。128は頭部欠失する。頭部はいずれも短く曲折し、126・128には木質が残存する。131はＳＢ4から出土した鉄製品で、鉄鏃の逆刺かあるいは逆にして雁股式鉄鏃の2つの可能性が考えられる。132は、ＳＢ3から出土した鉄器片で、井上山遺跡（第39図　2）に類似する鉄鑿と推定される。下半部を欠失し断面円形とみられる鑿部をとどめている。

まとめ

平成 14年度の調査により検出した遺構は、竪穴住居跡 4軒、掘立柱建物跡 40棟、溝状遺構 5条、土坑 22基、埋葬遺構 1基、柱穴 1500余りである。出土遺物は、弥生土器（壺、甕、鉢）、土師器（皿、坏）、須恵器（坏身）、瓦質土器（鍋）、輸入磁器（椀）、石製品（鏃、斧、叩き石、凹石、砥石、石塔）、鉄製品（釘、鑿、鏃）、土製品、木製品などが確認された。これらの遺構・遺物の出土状況から、柳井市の北東方向内陸部に位置する中院遺跡が、弥生時代から古墳時代、少し時間的空白をみるが平安時代、鎌倉時代、室町時代と断続的に営まれた集落遺跡であることをうかがい知ることができる。

中院遺跡は、山麓丘陵先端部ならびに大里川左岸の河岸段丘上に立地している。後世の水田化の際の削平・攪乱によって遺跡内で遺構の深さや残存状況に違いがあるものの、概ね弥生時代の遺構の残存状況は良い。中世の遺構は浅いものが多く、遺物の量も少ない。胎土に雲母を含むものを多く検出したが、粘土の産地を特定するまでには至っていない。また、検出した遺構や出土した遺物に早い時期から伊予地域を中心とした瀬戸内地域との幅広い交流を示すものが確認された。以下、それらについて考察を加えながら述べてみたい。

分銅形土製品　瀬戸内地域を中心に北部九州から北陸までの西日本の広い範囲で出土している弥生時代の遺物の一つで、現在 450点を超える出土例が報告されている。特異な器形や顔面表現、希少性や性格など謎を秘めた興味深い遺物である。

このたびの調査では、遺構から 2点の分銅形土製品が出土した。ＳＢ 3から出土した分銅形土製品は、円形の上半部片で人的顔面表現をもつ。目は爪または爪状施文具による刺突、眉と鼻は接続させ、貼り付け突帯によって表現している。口は欠失するが、表情から明地遺跡・文京遺跡のものとよく類似している。明地遺跡のものとの相違点は、時期（中院 後期前半、明地 中期後半）、出土遺構、形状、厚さ、頭髪を表したと思われる表現の有無などである。文京遺跡のものとのは、円形の形状や頭髪を表現したと思われる装飾が表裏・側縁部に施されている点、赤彩が施されているなど共通点が多い。希少性の高さ、表現の多様性、出土場所の規則性などから、遣任の職人ではなく村の個人が製作したと思われる分銅形土製品で、形や顔面表現の共通性が認められたことは、伊予・周防地域との密接な交流を示すものとして注目したい。

高坏（脚部の透かし）　高坏は、中期以降出土量が増加する。祭祀に使用されることも多く、壺や甕に比べると日常性は低い土器で、土器組成に占める割合も低い。脚部に透かしをもつ例は希少性が高い。

このたびの調査では、高坏が 8点出土したが、そのうち脚部に透かしをもつものが遺構から 3点、遺物包含層から 1点出土した。貫通をしていない矢羽形透かしと凹線文をもつものが 3点、円形のものが 1点である。時期は前者は中期後半から後期前半、後者は後期の所産と考えられる。

高坏の透かしは、丸形（楕円も含む）、長方形、三角形、矢羽形などがあり、その形には、時期や地域によって特徴がある。北部九州は、前期から長方形が中心で、後期には丸形のみとなる。南九州は、中期は概ね長方形が占め、中期末に凹線文と矢羽形が出土する。この地域も後期には丸形一色となる。四国は伊予に中期前半に矢羽形がみられるも、阿波は全期を通じて丸形が主体で、伊予も中期後半から丸形となる。中国は、他地域との影響をもっとも受けており、様々な形が混在する。瀬戸内地域を中心に三角形が後期前半まで一部に残る。後期は丸形のみとなる。畿内は中期前半から後期まで一貫して丸形である。中期頃まで各地域にみられた特徴が後期には画一化されていく様子が伺える。以上のことからも、矢羽形の透かしが存在していた時期や、地域は非常に限定的である。今回の調査で出土した高坏の中で、矢羽形の透かしをもつものが高い割合（３ 8）で出土したことは、伊予との交流を考える上で大変興味深い。

張り出し部を有する竪穴住居跡　このたびの調査で、3軒の竪穴住居跡から張り出し部を確認した。時期は 3軒（ SB2 3）が弥生時代後期前半、 軒（ SB1）が弥生時代終末期のものである。前者は円形、後者は方形の住居跡である。いずれも張り出し部は住居部の両側に位置しており、入口と考えられる。それまで県内では、張り出し部は確認されていない。その理由は、後世の開発によって削平を受けた際、浅い掘り込みのため消滅しやすく検出が困難なためであろう。

事実、テラス状の張り出し床面を有するＳＢ 3において、10cm程度でも上面を削平されていれば全体像を確認することは不可能であったであろう。入口の方向の規則性について、今回の調査だけの少ない事象から判断するには無理があるため、瀬戸内各県で検出されている張り出し部を有する住居跡の報告を加えて考察してみたい。

最も張り出し住居跡の報告が多い県は香川県で、現在 30を超える事例が報告されている。時期は弥生時代後期後半～終末期が最も多い。本遺跡のSB2 3と同時期の住居跡の事例は 2例で、一の谷遺跡群（ SB306）と上天神遺跡（ SH01）である。前者は方形張り出し部を 3カ所有する花弁形住居跡である。張り出し部は、西・南・南東方向にほぼ同サイズである。ただ、SB2のような排水を施す溝が廻るのは南東方向の一つである。後者は北側に 70cm程度の張り出し部を有する。その他の時期（後期中葉～終末期）の住居で同県の住居跡で張り出し方向を確認できたものを紹介すると、西側が 10軒で最も多く、次に北側の 7軒、東・南側は 5軒ずつであった。愛媛県では、小富士遺跡（ 号・ 号住居跡）から 2軒の張り出し部を有する円形住居跡の報告がある。 号住居跡は北側に 3カ所、南側に 1カ所、計 4カ所の方形の張り出し部を有する。北側の残存状況が良くはないが、張り出し部全てに排水施設が施されている。工作や物置としての空間という解釈をされている。 2号住居跡は、南側に方形の張り出し部を確認することができる。また、文京遺跡（ 年次 SB6）からも花弁形住居跡の可能性を示唆する後期の住居跡の報告がある。徳島県では、黒谷川都頭遺跡（ ・ ・ ）からは、建替えや拡張の可能性があるものを含め、複数の張り出し部を有する後期後半の円形住居跡の報告が上がっている。特に黒谷川都頭遺跡 （ SB601）は南北対称に整然と配置し、排水施設も施されている。朱精製工房の換気や明かり取りのためのものと考えられている。

以上の結果から、張り出し部の方向性には規則性は認められない。村の大きさや広場の向きなどに合った合理的な方向に入口を設けていたと考えられる。また、張り出し部が 1つであっても、床面の形（テラス状・階段状など）や規模などから、どのような施設かを吟味してみる必要がある。張り出し部が複数付属する場合は、まず建替えあるいは拡張の可能性を念頭において考えるべきであろう。また、入口以外の祭壇・物置・工作場などの場合、頭上空間を確保する必要があり、壁面をもつ住居が存在した可能性は否定できない。したがって、張り出し部を検出した場合、壁立式住居跡の可能性を視野に入れ、側柱穴の可能性のある周辺の柱穴まで考慮する必要がある。ここで、壁立式円形竪穴住居の可能性が高いと考えられる黒谷川都頭遺跡 （ SB601）を紹介する。実線は側柱穴と思われる柱穴を結んだものであるが、私案の域を超えるものではない。

第 39図　黒谷川都頭遺跡　（ SB601）

現在、壁立式住居跡の事例が少ない大きな原因に、絶対数の少なさが考えられる。縄文・弥生時代を通して伏屋式竪穴住居が全国的に普及分布する中、いつの時期から壁立式竪穴住居が出現したのか、それが一般的な住居として普及したのか、それとも特定階級の住居として存在したのかなど興味は尽きない。今後一つ一つの事例をつなぎ合わせていくことで、当時の社会の仕組みや瀬戸内地域内の文化的交流の姿が今以上に具体的に明らかになっていくであろう。

このたびの発掘調査で、この地域における歴史的背景を明らかにしていくための貴重な資料を得ることができ、重要な文化財の記録を後世に残すこととなった。ただ、中院遺跡の性格を述べるには資料が不足しており、今後予定されている大里地区での調査や多方面からの資料の集積を待ちたい。

引用・参考文献

徳島県教育委員会『黒谷川都頭遺跡　　』1986 1990 1995　香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財センター『同清水遺跡』2001
財団法人愛媛県埋蔵文化財センター『四国縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書　小富士遺跡』1991
山口県『山口県史　資料編　考古　』2000
愛媛大学　埋蔵文化財センター　『文京遺跡　第２３次調査』1992
九州古文化研究会『古文化談叢　第 3集　　梅崎惠司　弥生時代西日本の高杯脚部の透孔』1994
大塚初重 他　『考古学による日本歴史 15　家族と住まい　宮本長二郎　竪穴住居の復元』1996

中院遺跡４地区 SB３出土の分銅形土製品の検討

有馬　啓介

はじめに

今回行われた中院遺跡の発掘調査において２点の分銅形土製品が出土した。４地区 SB３出土の分銅形土製品は、顔面表現が豊かで、西部瀬戸内地域の分銅形土製品の特徴をよく表している。また、大きさは復元すれば山口県内では熊毛郡田布施町の明地遺跡[註１]の出土例につぐもので、中院遺跡の性格を知る上でも貴重な資料である。ここでは、中院遺跡４地区 SB３出土の分銅形土製品の顔面表現を中心に検討する。なお、分銅形土製品の各部の名称は、森田孝一氏[註２]の案に準じる。

明地遺跡出土例との類似点

中院遺跡出土の分銅形土製品は上面部の右半分のみ残存しており、全体のほぼ１４に相当する。隅丸方形の円版に刳り込みを入れた形態を呈する。明地遺跡出土のものに比べ、上縁部は若干丸味を帯びる。厚さは最大１０cmで明地遺跡出土のものの約１３である。

上面部の顔面表現には目、鼻、眉、頭髪がある。目は爪、あるいは爪状の工具によって２回の刺突で表現されており、三日月形である。明瞭な三日月形の明地遺跡出土のものに比べ、表情が柔らかい。口は欠損により不明であるがおそらく目と同様に三日月形であろう。鼻は高さ約０８cmで、左右の眉に続く。鼻、眉ともに断面形が三角形の突帯を貼り付けている。鼻穴は刺突により２点ほどみられる。明地遺跡出土のものも鼻穴はあるが、鼻頭が摩滅している。右眉は目の上で欠損しているが、貼付突帯の剥落面がはっきりと跡となって残っている。眉は上面部右縁まで延びていたことは認められるが、明地遺跡出土のもののように側面まで延びていたかは不明である。上面部の刺突文は頭髪の表現と考えられる。表面の３条の刺突文は裏面へ続き、上縁面にも刺突文が見られれる。表面と上縁面に径０２cmの管状のもの（竹管）で刺突が行われているのに対し、裏面は径０１cmとやや小さい施文具で深く刺突されている。中院遺跡出土の分銅形土製品は眉が延びていたと考えられる上面部右縁から刳り込み部にかけて欠損が見られる。孔の部分で欠損した可能性もある。孔が上面部両下端に存在していたとすれば、明地遺跡出土のもののように外湾していたことも考えられる。

表面には赤色顔料の塗布が見られる。胎土に直接練りこんだのではなく、表面のみ塗布されている。眉の貼付突帯から下が赤く染まっている。赤色顔料で上面部表面下半部を塗布することによって顔部が際立って見える。頭部と顔部の表現方法の一つであろう。

上面部に貼付突帯をもつ分銅形土製品に関する考察

分銅形土製品の出土は瀬戸内地域や山陰地域に多く見られる。中でも分布の中心は吉備地域である。吉備地域と西部瀬戸内地域とでは上面部の表現方法に違いがあることはこれまでにも多くの研究者によって指摘されてきた。ここでは西部瀬戸内、特に周防・伊予地域の特徴の一つである上面部の鼻や眉を貼付突帯で表現する分銅形土製品について考察することによって、中院遺跡出土のものの検討を行う。なお、取り上げる分銅形土製品は谷若倫郎氏の分類[註３]では周防型、伊予Ａ・Ｂ型に属する。

平面形状 - 平面形状は円形、隅丸方形、方形に分類される。円形には祝谷六丁場　、御幸寺山、松山大学構内があり、眉の刺突文、孔の位置など吉備地域の抽象的な顔面表現の分銅形土製品に類似する点が注目される。周防地域の分銅形土製品は中院と明地が隅丸方形で、井上山　　と岡山と天王

は方形に属する。

目・口 - 目と口には三日月状のもの、横一線のもの、刺突によるものがある。施文具には半截竹管や爪、ヘラなどが考えられる。

貼り付け突帯（眉・鼻） - 貼付突帯で眉と鼻を繋げているものが大部分を占める。眉が横一線に延びるものやつり上がるものもあるが、大半が中院のように三日月状に湾曲している。明地、文京　、谷田　は眉が側面まで延びている。いずれも顔面表現が豊かな点が注目される。中院や明地でみられる鼻穴の表現は他には見られない。

耳 - 抽象的な顔面表現や顔面らしい表現のない分銅形土製品では孔を有することがすなわち耳の表現であるとは言い難い。特に吉備地域においては孔を上端部に複数有しているものも多数ある。[註4] しかし、具象的な顔面表現の分銅形土製品では孔は紐を通すためのものだけではなく、耳表現の一部でもあると考えられる。事実、具象的な顔面表現の分銅形土製品では上面部下端にのみ孔を有することが多い。谷田　は眉の上に切れ込みがある。また、明地は上面部両下端が外湾する。耳表現の一部であろうか。

頭髪 - 頭髪表現のある分銅形土製品は水満田の　猫文を除いてすべて刺突文である。中院のように上面部表面・裏面、上縁面（側面）に頭髪表現が見られるのは、文京　（刺突文）と　味四反地（刺突文）と谷田　（刺突文）、水満田（　猫文）のものがある。

赤色顔料（ベンガラ・朱） - 赤色顔料が剥落せずに残っており、塗布を確認できるのは3点中13点である。祝谷六丁場　のように眉のみ赤色顔料が確認されたものはあるが、中院のように上面部下半部にのみ塗布したものはない。また、平面形状による違いは見られない。

出土状況 - 分銅形土製品は集落やその周辺部から出土することが一般的である。中院遺跡の分銅形土製品は竪穴住居黒褐色粘質土中層より出土した。これまでの出土例を見てもそのほとんどが破損品である。周防地域では現在のところ完形での出土はなく、伊予地域でも御幸寺山、文京　、文京　と少ない。中院の残りの上面部左半分や下面部も確認できなかった。また、床面からの出土ではなく、埋土の中層からの出土したということにも注目したい。住居外からの流れ込みの可能性もあるが、分銅形土製品の祭祀性からの住居埋土の中へ埋める行為を通じて生命に新たな強い生命の再生を祈った可能性もある。[註5] 他の例を見ても、竪穴住居といった遺構の埋土や包含層からの出土は多い。今後さらに検討すべき課題である。

時期 - 周防・伊予地域の上面部に貼付突帯をもつ分銅形土製品は弥生時代中期中葉から後期前半にかけて見られる。同地域における分銅形土製品の初見は中期前葉頃で、その後、後期にわたって存続する。分銅形土製品が最も多く見られるのは中期中葉から中期後葉にかけてで、上面部に貼付突帯をもつ分銅形土製品の出土時期もこの頃に集中する。後期前葉（前半）の中院、祝谷アイリ、松山大学構内、文京　以降は簡略化された顔面表現のものが多くなる。中院等の出土例で上面部に貼付突帯をもつ分銅形土製品は終わりを告げる。

中院遺跡4地区SB3出土の分銅形土製品を周防型の範疇で考えることは難しい。周防地域と伊予地域の分銅形土製品の大きな違いは平面形体とともに目と口の表現にあると考える。周防地域の分銅形土製品は方形のものが大半を占め、隅丸方形や円形は少ない。一方、伊予地域では方形もあるが

周防地域に比べ隅丸方形の割合が高い。上面部に貼付突帯をもつ分銅形土製品の大半は隅丸方形である。また、伊予地域の上面部に貼付突帯をもつ分銅形土製品の多くは目と口を有する。三日月形で線刻するのが特徴である。それに対し周防地域において明確に目と口の表現が分かるのは中院、明地を除いては井上山　の口の表現と井上山　の目の表現、追迫遺跡出土の目と口の表現（三日月状）の例以外にない。中院と明地の分銅形土製品が伊予地域の影響を直接受けた可能性は高い。そして、顔面表現は優美で大きく伊予地域のものと比べて遜色ない。分銅形土製品として成熟した感さえある。伊予地域と海を隔てた周防地域で分銅形土製品の大型化が起こったとは考えられないだろうか。この2点の分銅形土製品で多くを語るのはいささか差し出がましい。今後の出土例に注目したい。

おわりに

上面部に貼付突帯をもつ分銅形土製品は伊予地域では松山平野に集中する。今回発掘調査を行った中院遺跡とこれに類似した特徴をもつ分銅形土製品が出土した明地遺跡は周防地域でも最も松山平野に近い場所にある。伊予系の土器も多数出土した。瀬戸内海は弥生人にとって文化交流や移動の大きな障害ではなかったようである。松山平野の　味四反地遺跡に近い　味高木遺跡で船を描いた弥生時代後期の複合口縁壺と思われる線刻画土器[註3]が出土したことは非常に興味深い。

註

1）岩崎仁志・土井勉・花岡隆義「明地遺跡　」『山口県埋蔵文化財調査報告書』167　（財）山口県教育財団　山口県教育委員会　1994
岩崎仁志「明地遺跡出土の分銅形土製品をめぐって」『陶損』7　山口県埋蔵文化財センター　1994　弥生時代中期後葉の土器が含まれる土坑の床面より出土した。長さ 21.7cm、幅 16.5cmで全体の形を知りうるものとしては国内最大である。

2）森田孝一「分銅形土製品」『山口県史　資料編　考古1』山口県　2000

3）谷若偏郎「分銅形土製品にみる地域相 - 西部瀬戸出土例を中心として - 」『花圃史学』10　花圃大学史学会　1989

4）高橋護「分銅形土製品」『弥生文化の研究 8』雄山閣出版　1987
高橋護氏は吉備地域の分銅形土製品にはその大きさやえぐり、抽象的な顔面表現から仮面としての使用があり、上縁部に並ぶ小孔を使って、頭巾のようなものに取り付けて用いたのではないかと考えている。

5）川越哲志「安芸・備後の分銅形土製品」『広島大学統合移転地埋蔵文化財発掘調査年報』　広島大学統合移転地埋蔵文化財調査委員会　1983

6）石井龍彦・河島清編「追迫遺跡」『山口県埋蔵文化財調査報告』107　日本道路公団徳山工事事務所　山口県教育委員会　1988

7）梅木謙一・宮内慎一編「鼎原地区の遺跡　」『松山市文化財調査報告書』46　松山市教育委員会　（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター　1994

引用・参考文献

・乗安和二三・吉瀬勝康編『井上山』井上山遺跡発掘調査団　1979
・梅木謙一編「祝谷アイリ遺跡」『松山市文化財調査報告書』25　（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター　1992
・宮崎泰好編「祝谷６丁場遺跡調査報告書１」『松山市文化財調査報告書』24　松山市教育委員会　松山市立埋蔵文化財センター　1991
・宮内慎一編「松山大学構内遺跡　- 第３次調査 - 」『松山市文化財調査報告書』49　松山市教育委員会
（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター　1995
・森光晴・大山正風・西田栄「文京遺跡」『松山市文化財調査報告書』11　松山市教育委員会　松山市文化財協会　1976
・栗田茂敏編「文京遺跡 - 第２・３・５次調査 - 」『松山市文化財調査報告書』28　愛媛大学（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター　1992
・梅木謙一・宮内慎一編「道後城北遺跡群」『松山市文化財調査報告書』30　（財）松山市生涯学習振興財団文化財センター　1992
・宮本一夫編「文京遺跡第 10次調査」『愛媛大学埋蔵文化財調査報告』　愛媛大学埋蔵文化財調査室　1991
・田崎博之編「愛媛大学埋蔵文化財調査室年報 - 1997・1998年度 - 」
『愛媛大学埋蔵文化財調査報告』　愛媛大学埋蔵文化財調査室　2002
・梅木謙一・武正良浩編「福音小学校構内遺跡 - 弥生時代編 - 」『松山市文化財調査報告書』50　松山市教育委員会
（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター　1995
・岡田敬彦編「一般国道３号砥部道路関係埋蔵文化財発掘調査報告書　」『埋蔵文化財発掘調査報告書』2
（財）愛媛県埋蔵文化財調査センター　1980
・阪本安光編「谷田　遺跡」『愛媛県総合運動公園関係埋蔵文化財調査報告書　』愛媛県教育委員会　1982
・長井数秋編「西野　遺跡」『愛媛県営総合運動公園関係埋蔵文化財調査報告書　』愛媛県教育委員会　1979
・森田孝一「山口大学埋蔵文化財資料館所蔵の分銅形土製品」『Re:ルゥ 3　山口大学考古学研究室　1986
・森田孝一「山口県内出土の分銅形土製品集成」『山口考古』18　山口考古学会　1989
・小野忠熙編「島田川」山口大学島田川遺跡学術調査団　1953
・近藤義郎・柴村敬次郎「分銅形土製品の新資料」『わたしたちの考古学』14　考古学研究会　1957
・愛媛県史編纂委員会『愛媛県史　資料編　考古』愛媛県　1986
・東潮「分銅形土製品研究（１）」『古代吉備』7　古代吉備研究会　1971
本構で使用した分銅形土製品実測図は上記の各報告書・文献から転載した（一部改変）。

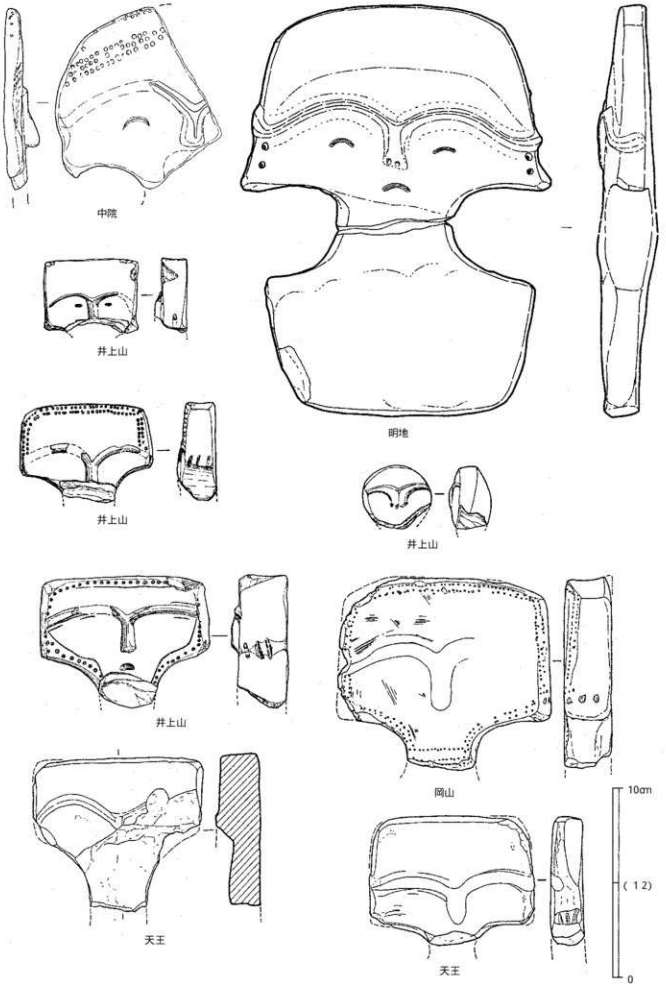


図1　周防地域出土分銅形土製品

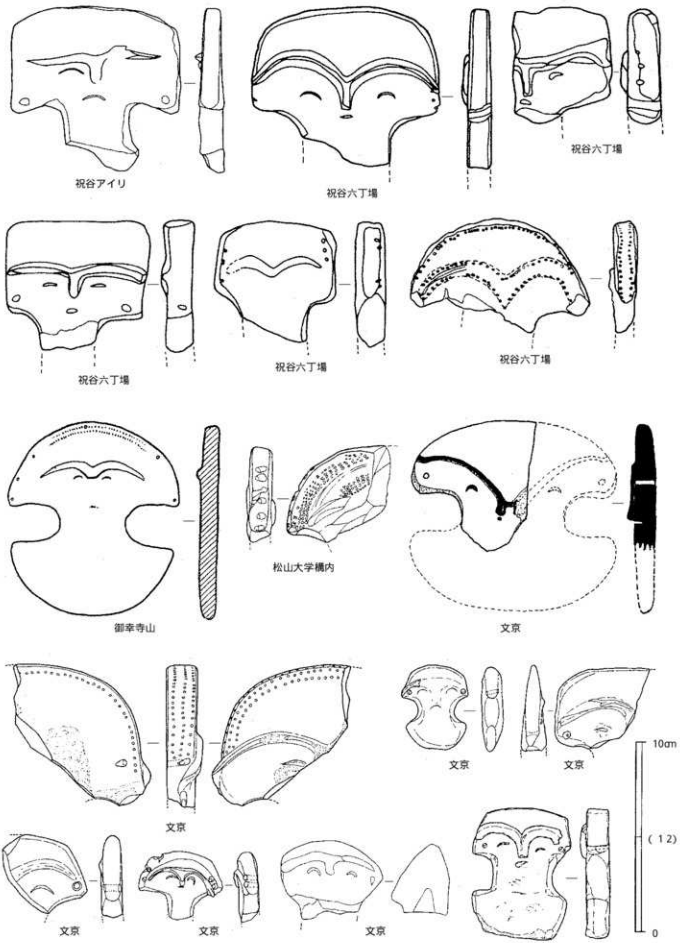


図2　伊予地域出土分銅形土製品

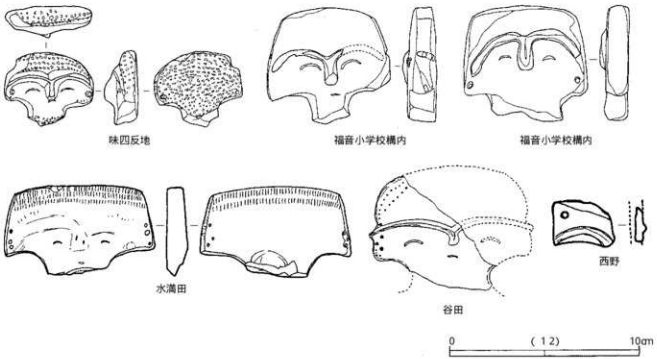
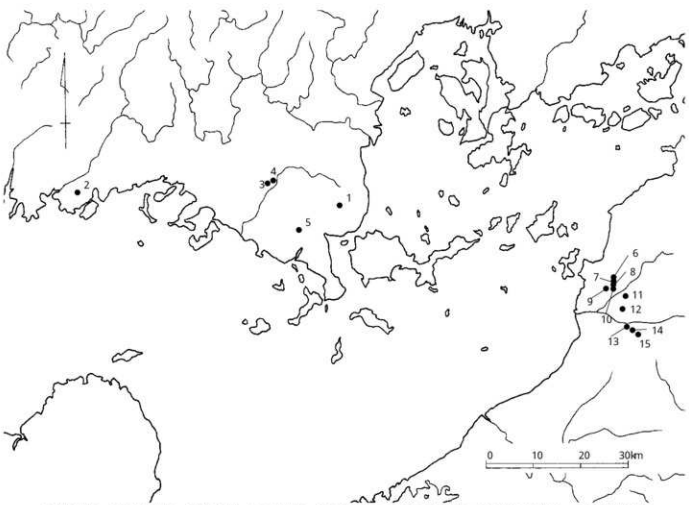


図３　伊予地域出土分銅形土製品

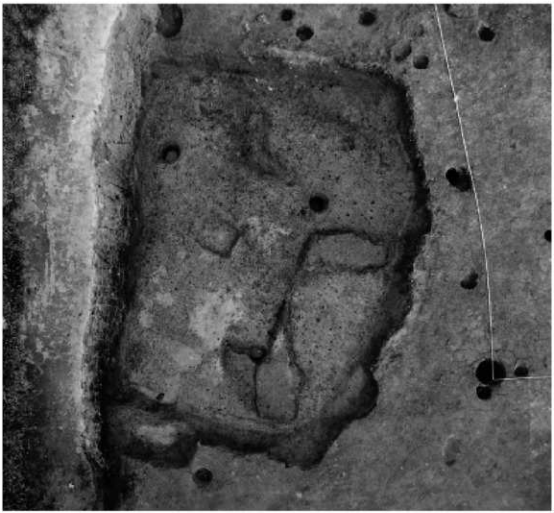


1 中院遺跡　2 井上山遺跡　3 岡山遺跡　4 天王遺跡　5 明地遺跡　6 祝谷アイリ遺跡　7 祝谷六丁場遺跡　8 御幸寺山遺跡
9 松山大学構内遺跡　10文京遺跡　11　味四反地遺跡　12福音小学校校内遺跡　13水満田遺跡　14谷田　遺跡
15西野　遺跡

図４　遺跡分布図

東上空より遺跡を望む

遺跡全景（北より）



1 地区　SB1（南より）

（北より）

（西より）

1 地区　SB1　遺物出土状況

1 地区　SB4　遺物出土状況 (西より)

1 地区　SB4　遺物出土状況 (東より)

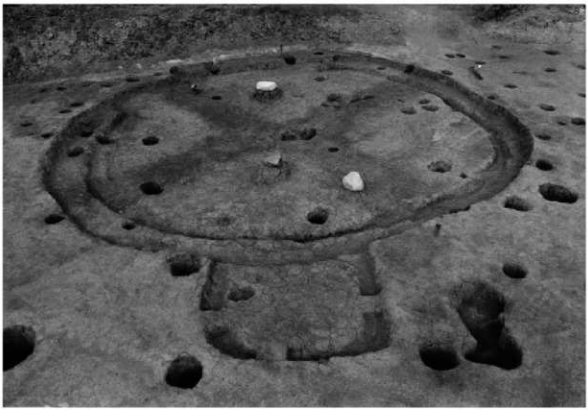
図版 8

4 地区　SB2（南より）

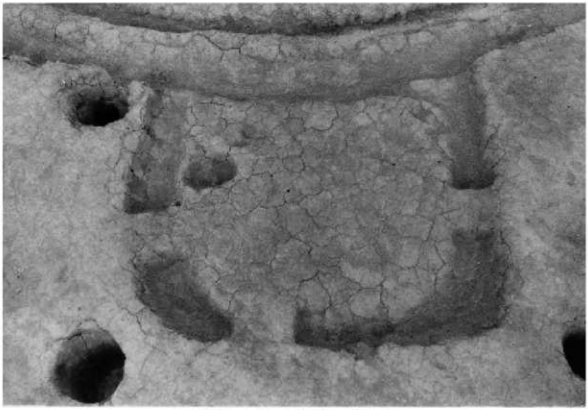
（東より）

（南より）

4 地区　SB2　土器出土状況

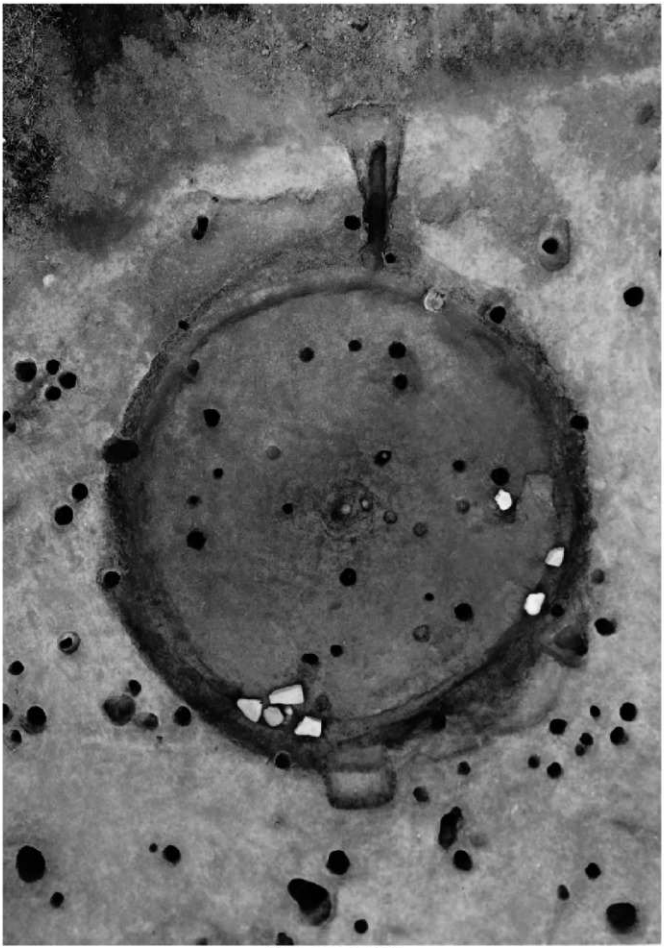


4 地区　SB2（南より）

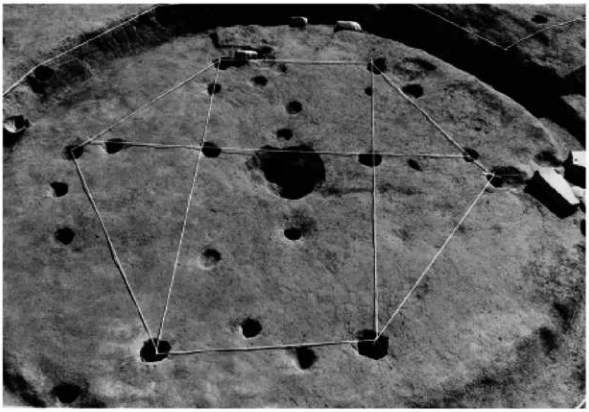


4 地区　SB2　張り出し（南より）

図版 10



4 地区　SB3（南より）



4 地区　SB3（西より）

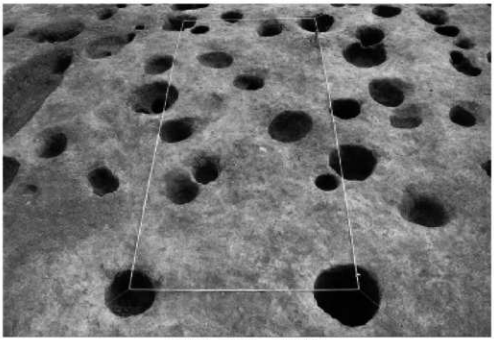
4 地区　SB3　土層（西より）

（北より）

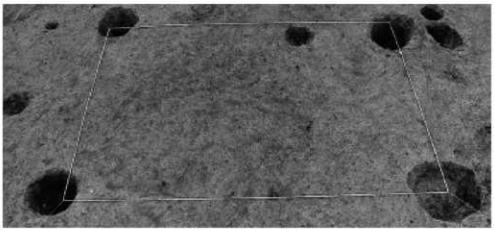
（南より）

4 地区　SB3　土器出土状況

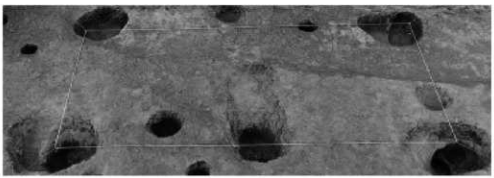
図版 12



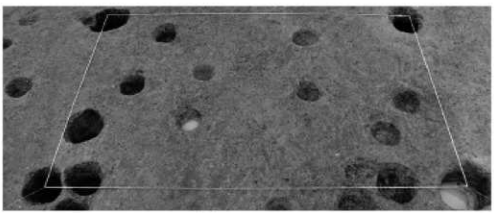
2 地区　SB21 （北より）



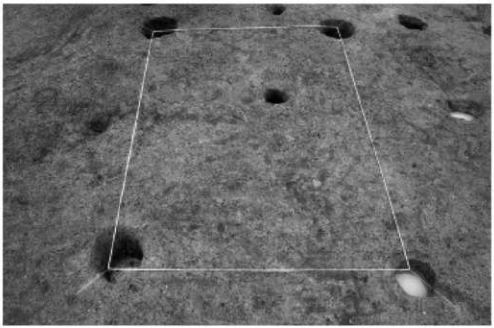
4 地区　SB6 （南より）



2 地区　SB7（南より）

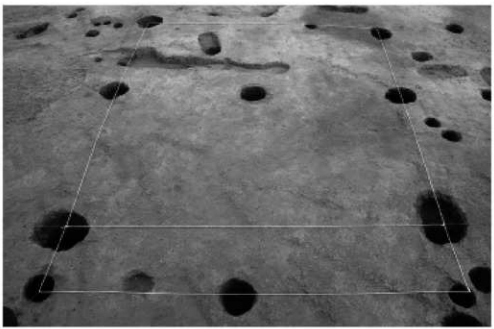


4 地区　SB7（南より）



4 地区　SB5（南より）

4 地区　SB8（東より）



3 地区　SB39(南より）

2 地区　SD1　完掘（北より）

2 地区　SD1　土層（北より）

セクション 1（北より）

セクション 2（西より）

セクション 3（北より）
2 地区　SD1　遺物出土状況

セクション４（北より）

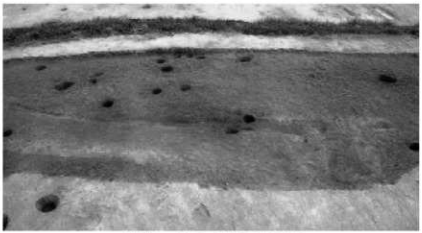
セクション４（東より）

２地区　SD1　遺物出土状況

セクション５（北より）

セクション５（東より）

セクション６(東より）
２地区　SD1　遺物出土状況



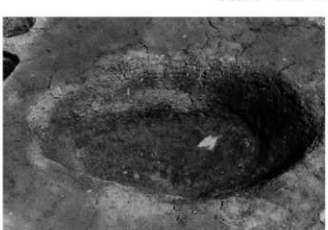
3 地区　SD4　完掘（南より）

3 地区　SD4　土器出土状況（南より）

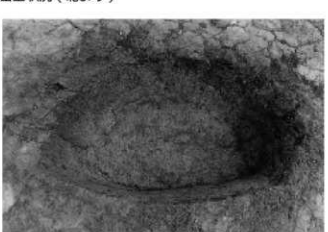
1 地区　SK3　土器出土状況（北より）

1 地区　SK4　土器出土状況（東より）

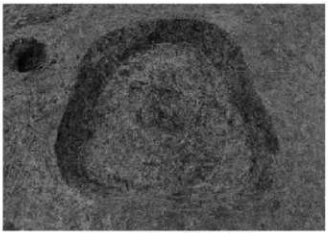
3 地区　SK13　土器出土状況（北より）



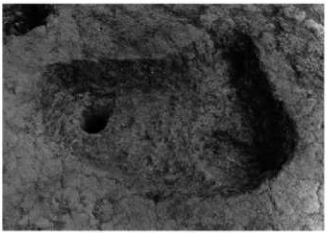
1 地区　SK1　完掘（南より）



2 地区　SK6　完掘（南より）

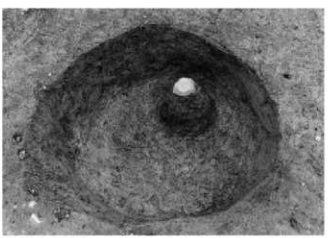


2 地区　SK22　完掘（東より）



2 地区　SK7　完掘（南より）

2 地区　SK9　完掘（西より）

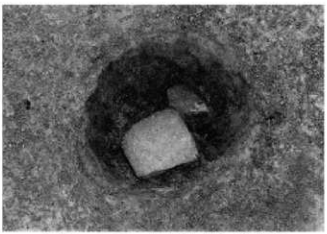


1 地区　SK23　土器出土状況（東より）

2 地区　ST1　遺物出土状況（東より）

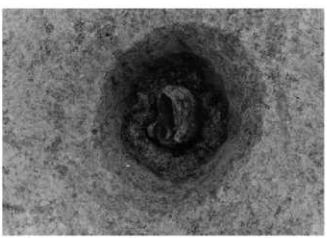
2 地区　ST1　漆塗木製品出土状況（南より）

4 地区　SP108　土器出土状況（西より）

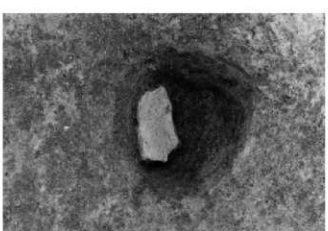


4 地区　SP140　土器出土状況（東より）

4 地区　SP102　土器出土状況（北より）

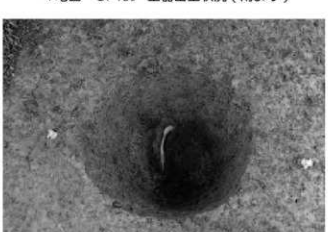


4 地区　SP141　土器出土状況（西より）

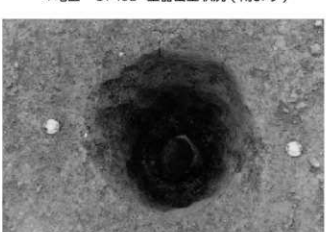


4 地区　SP139　土器出土状況（南より）

4 地区　SP152　土器出土状況（南より）

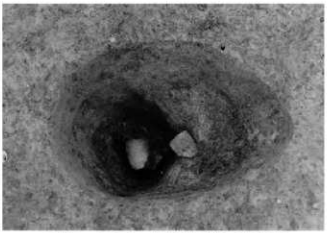


2 地区　SP153　土器出土状況（南より）



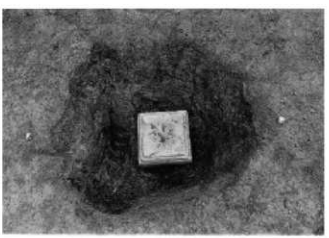
2 地区　SP207　土器出土状況（東より）

2 地区　SP52　土器出土状況（東より）



2 地区　SP154　土器出土状況（南より）

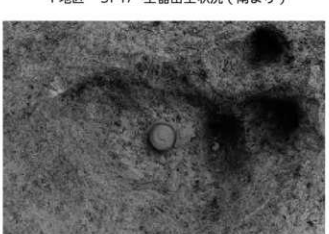
2 地区　SP24　土器出土状況（東より）



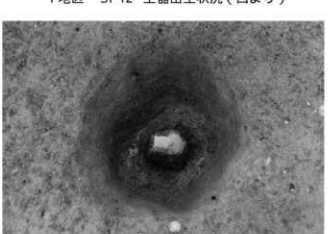
2 地区　SP27　石塔出土状況（東より）

1 地区　SP17　土器出土状況（南より）

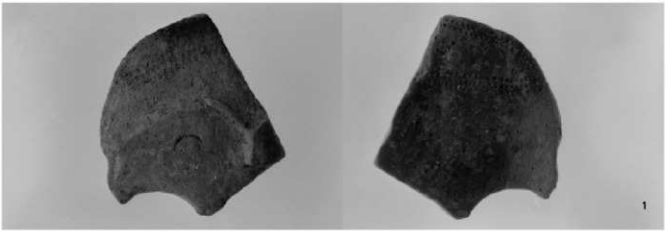
1 地区　SP12　土器出土状況（西より）

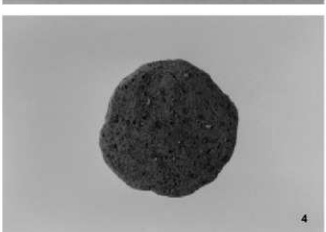


1 地区　SP161　土器出土状況（西より）

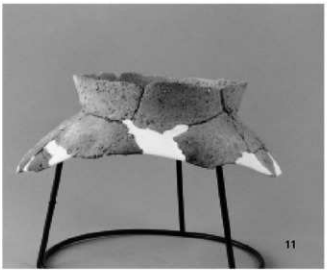


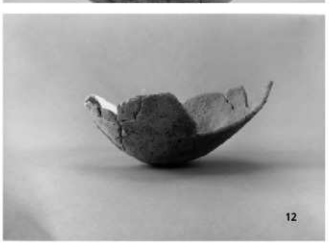
1 地区　SP165　土器出土状況（西より）





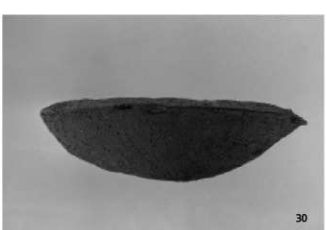
1地区　SB2・3　出土土器・土製品



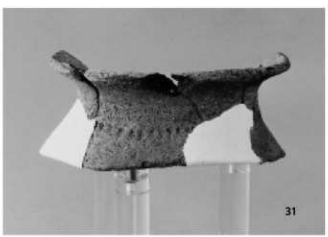


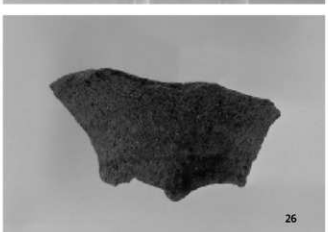
1地区　SB1　出土土器

1 地区　SB4　出土土器



2 地区　SD1　出土土器

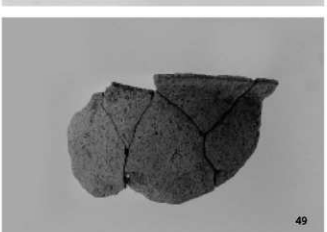




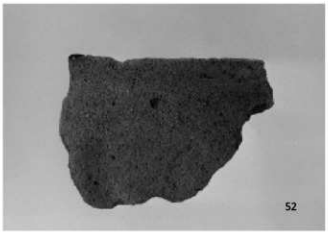
2 地区　SD1　出土土器

2 地区　SD1　出土土器

2 地区　SD1　出土土器



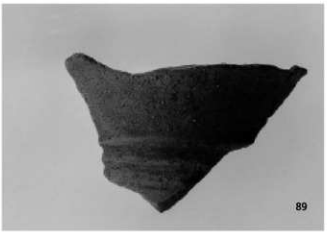
2 地区　SD1　出土土器

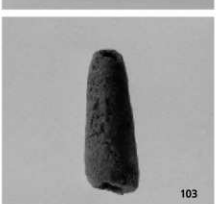


2 地区　SD1　出土土器

2 地区　SD1　出土土器・土製品

SK・ST　出土土器

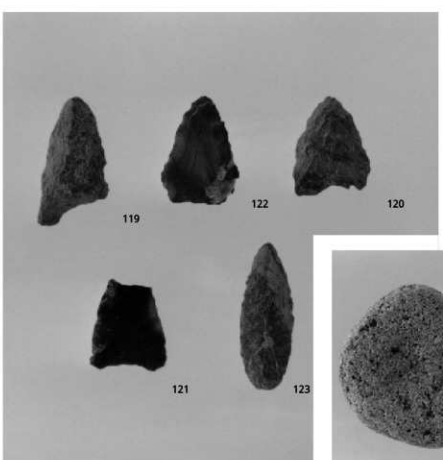




SK・SP　出土土器・土製品

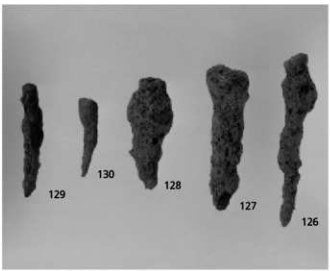
SP　出土土器

遺物包含層出土土器



出土石製品

出土石製品



出土鉄製品

報告書抄録

ふりがな	ちゅういんいせき	
書名	中院遺跡	
副書名		
巻次		
シリーズ名	山口県埋蔵文化財センター調査報告	柳井市埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ番号	第36集	
編著者名	西尾健司　椿　英一　有馬啓介	松岡睦彦
編集機関	山口県埋蔵文化財センター	柳井市教育委員会
所在地	〒753-0073 山口県山口市春日町3番22号 TEL083-923-1060	〒742-8714 柳井市南町1-10-2 TEL0820-22-2111
発行年月日	西暦2003年3月24日（平成15年3月24日）	

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
中院遺跡 （ちゅういん いせき）	柳井市大字日積字中院 （やないし おおあざ ひづみ あざ ちゅういん）	35212		34°33′	132°9′35″	20020715 ～ 20021205	3,200	ほ場整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
中院遺跡	集落跡	弥生 中世	竪穴住居跡　4軒 掘立柱建物　40棟 溝　5条 土坑　22基 墓　1基 柱穴　150個	弥生土器 土師器 須恵器 瓦質土器 陶器 輸入磁器 土製品 石製品（鏃、斧、叩石、凹石、砥石、石塔） 鉄製品（釘、鏃、鑿）	張り出し部を伴った弥生時代後期前半の住居跡を検出 住居跡から分銅形土製品が出土 大地を分けたU字型断面をもつ溝を検出

山口県埋蔵文化財センター調査報告　第36集

中院遺跡

2003年3月

編集・発行　財団法人山口県教育財団
山口県埋蔵文化財センター
〒753-0073　山口市春日町3番22号
柳井市教育委員会
〒742-8714　柳井市南町1-10-2

印　　刷　瞬報社写真印刷株式会社
〒752-0927　下関市長府扇町9番50号